研究紀要

第 9 号

（目　　次）

論　文

天野貞祐における人間研究（ノート３）……蝦　名　賢　造… 1

中学生の体力評価に関する研究……音　海　紀一郎…(1)

≫疾風怒濤≪ を背景とした戯曲
『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』に
展開されるゲーテ的主題を中心に……柿　原　啓　志…(9)

紹介と書評

小松芳喬著『鉄道の生誕とイギリスの経済』……久　慈　栄　志… 23

資　料

天野貞祐年譜……蝦　名　賢　造… 19

Dr. Spinner 教授の資料についての一考察……合　田　　憲…(24)
附 Goethe-Institut のゼミナール<Berlin, 1985>に
関連して

1985

獨協中学校・高等学校

天野貞祐における人間研究

（研究ノート三）

蝦名賢造

まえがき

私の「天野貞祐における人間研究」（研究ノート）は、獨協学園創立百周年に当り、その準備などのために目白の中学校・高等学校校長として就任したことが直接の契機となった。その記念事業の一つとして石碑「獨協学園長・十三代校長天野貞祐先生顕彰記」を百周年記念体育館前に刻んだが、そのためにも天野先生の生涯と思想のあらましは知っておく必要があった。

そのうちに数重なる朝礼の言葉を中高校生に話してゆく過程で、ますます獨協学園中興の祖天野先生の全体像をとらえる必要性が強まってきた。そういうことから本校「研究紀要」の誌上を借りて、創立百周年記念号（七号）においては、天野先生を、まず近代日本の精神的宗教的教育的革命の上で画期的な役割を果した二人の巨人、内村鑑三と新渡戸稲造との関係においてとらえようと試みた。この両人はともに〝札幌農学校〟第二期生として同期であり心友であったので、両人の強い影響下にあった先生を、私は〝札幌農学校の子〟としてとらえようとしたのであった。この表現は、実は両人より最も強い精神的信仰的思想的感化を受けた矢内原忠雄（元東京大学総長）の言葉であり、矢内原は戦中の過酷なファッシズムの段階にあって、自からを内村より〝神〟を、新渡戸より〝人間〟を学んだとし、国際平和と正義を主張してはばからなかった人であった。

ひきつづき「研究紀要」（八号）においては、私は天野先生の生涯と思想をより具体的に、より歴史的に追い求めようと試みた。素朴ながら私が描いた叙述の項目は、次のようであった。

まえがき—天野貞祐研究の現段階
真の意味での教育者としての天野貞祐
郷里の相模・津久井
天野生誕時の時代的背景
天野の家系
幼少時の自画像
三多摩—自由民権運動と困民党運動
獨逸学協会中学入学
獨逸学協会学校の発展
校長大村仁太郎と教師陣
一高文科入学

私は中学・高校長として就任三年目に、目白の中学・高校の教育の現状もやや分りかけてきていた。それとともに、何が目白の教育の改革を阻害してきているかについても、認識がゆくところもあった。他面どうしようもない絶望に捕われることもあった。なんのために目白に来たのであろうか、健康の急速な衰えとともに、自から暗夜独りでつぶやくこともあった。一方、中曽根内閣のもとでの臨時教育審議会による日本教育改革の方向も、なにか教育における基本的なものを欠落しているようにも思われたこと、しばしばであった。

私はこれまでの人生においてしばしば挫折し、思い悩んだ。その時、立ち止まって、反省し、そこで与えられた問題を主題に思索し、かつ著作することで立ちあがってきた。その繰り返しの中で、たゆまず、ねばり強く歩み続けてきた。そして人生を創造的に生きるということは、私にとっては一面著作に精力を集中することでもあった。

目白の獨協生活三年有半の中で私の歩んできた道はまことにたどたどしいが、その中で天野貞祐先生の諸著作を通じて教育九十五年の生涯と思想の一端に触れ得たことは、まことに喜びであり、幸いであった。そしていまようやく「天野貞祐伝」（西田書店）がまとまり、私は人生的なまた教育的な面でも、一つの峠を越えようとしつつある自分を覚える。さらに「天野貞祐伝」とともに公刊予定の「新渡戸稲造伝」（新評論・北海道著作集第二巻）の著作を通して、今後の自分に残された人生と社会において、いかに創造的な夢を描きながら歩んでゆかなければならないか、教えられて、感激の念を禁じ得ないのである。

しかも天野先生を捕える視点は、目白の中学・高校百年の歴史を離れた時、与えられたのであった。一昨年末私は沖縄に旅行し、そこでリンデンバウム叢書三「若き友へ」をまとめ、序言をしるした時、忽然として天野先生の全貌を、自分なりにとらえてみようという意欲が燃え上ってきたのであった。それは何といってよいか、沖縄での温かい嵐による恵みであった。しかしその時私を襲ったのは、これまで獨協百年の歴史の中での、狭い視野ではなく、日本の教育界での巨大な姿をとった天野像をとらえなければならないという示唆であった。たまたまその頃私は「新渡戸稲造伝—日本の近代化と太平洋問題」と題する原稿をとりまとめて獨協大学の「経済学研究」に投稿をしていたこともあり、私の視野は日本的世界的にも広がり、資料も多く発掘され、私は天野先生への異常なほどの人間研究に僅かに与えられた時間を投入していったほどであった。

このような天野先生研究の過程をいま振り返ってみると、ともあれ目白の中学・高校に深く感謝する。この研究の成果はいま西田書店を通じて印刷所に渡され、近く陽の目を見るであろうが、

そこでは次のような構成をとってとりまとめられている。

序章　まえがき
一章　天野家の家系
二章　相模・歴史的背景
三章　相模・地理的背景
四章　幼少時
五章　獨逸学協会学校生徒
六章　第一高等学校生徒
七章　京都帝国大学文学部学生
八章　造士館第七高等学校教授
九章　学習院教授
十章　京都帝国大学文学部教授
十一章　甲南高等学校長
十二章　第一高等学校長
十三章　日本育英会長
十三章　文部大臣
十四章　獨協中学・高等学校長
十五章　獨協大学の創設・初代学長
十六章　自由学園理事長
十七章　晩年
十八章　逝去
終章　天野の遺したもの―勇ましく高尚なる生涯

私は本著作を通じて――他の一連の著作と同じように、天野（以下敬称略）が生涯のそれぞれの段階において、迫り来る時代の課題の中で、どのような人間形成と思想形成を試みようとしてきたかを、まず明らかにしようと意図している。それに基づいて、天野がどのような教育理念の下に教育実践を推し進めようとしていたか、その過程を出来得る限り具体的に明らかにしようと考えている。

特に天野が昭和初期の迫り来るファッシズムの時代に触発され、道理の理念を高く掲げて抵抗した昭和十年代が一つの頂点となるであろう。また、戦後の平和と民主主義の時代において、天野が真の平和と民主主義のために戦った一高校長、さらに文部大臣時代がより具体的な戦いの証言としてとりあげられるであろう。それらはすべて「天野貞祐伝」に譲ることにする。そして本稿においては私が天野研究の過程において特に関心を抱かさせられた幾つかの視点に重点をおいて、私自身の挿話も交えながら研究ノートとして記録してゆくことにしたいと思う。

自由民権運動と天野貞祐

一つの視点は、いわゆる明治十年代の自由民権運動と天野貞祐

との関係についてである。

明治十年代の自由民権運動の発祥地の一として、相模国三多摩地方がいわゆる三多摩壮士の名のもとに、自由民権百年の歴史の回想のなかによみがえりつつあり、それは色川大吉教授（東京経済大学）らの力によることが多いようであるが、その一冊に「流轉の民權家・村野常右衛門伝」（大和書房）がある。天野も明治十年代、自由民権運動の盛んであった折、この郷土のすぐれたこの民衆政治家に触れ、「村野常右衛門氏のことなど」と題し父祖との関係についても及んでいる。しかもそれが昭和十六年、自由弾圧の最も厳しい時代に書かれているのは、きわめて示唆的である。天野の祖父三郎助は近隣でとりわけ学者として尊敬されていた人であり、父藤三も自由党員として国会議員にまでなった人である。三多摩壮士団の俊英として自由民権のために大いに戦ったことについては充分評価されうる存在であった。

しかし天野自身父祖について語ることは、僅かに、三、四にすぎない。天野の長兄康三の夫人は〝憲政の父〟といわれた尾崎行雄の令妹千代であった。したがって、天野家自体ある意味において自由民権運動の系譜において由緒ある家系ともいえないこともないが、天野自身それらについて生涯ほとんど語ることがなかった。それはそれなりにある種の意味があったのであろうと思われる。

一つ考えられることは、天野自身歴史的社会的認識と把握の方面においてより深い関心をむけなかったことによるものであろう。生涯の課題として、カント哲学を追い求めた天野にとって、最奥の本質的な課題は人生の意義を探究することに向けられていったことによるものであろう。ただ、しかしそれならば社会的歴史的感覚がなかったかといえば全くそうではなかった。その著書「道理の感覚」に裏打ちされた、鋭敏な、嗅覚のようなものが、基本姿勢として存在していて、その中に組み込まれた時代的感覚そのものの的確さが際立っている。いわば歴史と時代を先取りしうるような洞察力が、天野の内部に据えつけられ、働いていたのであって、それは、一つの驚異とすらいえるであろう。いま思うと、西田学派の俊英な門下生の多くが、俊英なるがために戦中大東亜戦争の世界史的意義について大いに語った時、天野はそれに組みすることなく、独り黙して語るところがなかった。また以下の項でも触れることになるが、一員として編集した岩波倫理学講座の中で、自由の思想家・羽仁五郎の「幕末における倫理思想」を絶讃した時、天野の歴史的社会的感覚の鋭敏さに瞠目させられるのである。

天野が家系の人々について触れることの少なかったことは、その謙虚な人柄によるものが多いであろう。しかし他面、天野はその家系の中で幼時より、あまりにも多くの〝悲哀〟を体験しつく

してきたということにも、大いに深い関係があるように私には思われてならない。私は研究ノートにおいて、天野の思想の源泉の一人に、一高時代の校長新渡戸稲造の影響をあげているが、新渡戸の本質は〝悲哀を知る人〟にあった。人生の悲しみを悲しみとして、それに耐えて人生の意義を見出しつつ神の御旨に従ってゆく、忍苦の人にあった。天野の本質もまた〝悲哀の人〟に近かったのではなかったかと思われる。中学時代最愛の母を失ったことは、天野の生涯の悲しみであった。天野が畏敬する次兄康虎を失なったことも、母とは異なる悲しみの源泉となった。天野の男兄弟の四人は、すばらしいほどの秀才ではありながら、その後の行旅においては必ずしもいろいろな意味においてより完全を期しうるようにはならなかったもののようである。天野はそれら兄弟姉妹の悲しみをあまりにも一身に背負いすぎ、その後の人生を歩んだように思われる。天野が運命についてしばしば語るとき、私は天野の言葉の背後にこのような人生の悲哀の現実を読みとらずにはおられない。しかし天野が希望について語るとき、運命の中よりすっくと立上って歩む姿勢を見上げることが出来る。

羽仁五郎と天野貞祐

羽仁五郎と天野との関わり合いの視点も、私自身深い関心をそそられる。

大正十年代末期、天野のドイツ・ハイデルベルグ大学留学時代に、わが国から当時悪性インフレ下のマルク安を狙らいつつ、後の日本の学界・思想界の俊英がドイツ留学を試みていた。九鬼周造もその一人であるが、その外に大内兵衛、三木清、羽仁五郎などの名が数えられている。したがって天野はハイデルベルグ大学に留学中、すくなくともこれらの人々と多少の交流があったであろうことは推測される。羽仁五郎ともおそらく当時すでに面識があったであろう。

それから数年後、昭和の暗闇時代に入ってゆくことになるが、戦前の昭和十五年、天野も監修者の一人として岩波講座倫理学が発刊されることになる。当時東京帝国大学経済学部に在学中であった私も早速それをとり寄せて愛読した一人であったが、天野は前述のようにその中で羽仁五郎の「幕末における倫理思想」を激賞し、次のような手紙を送っている。

拝啓　貴兄の「幕末における倫理思想」を読んで、つくづく敬服しました。

これほど人間を愛し、真理と正義とを愛する文章を、私はついにもよんだことがない。全く敬服に堪えません。

哲学の根底に斯ういふ愛がなければ、私は、どんなものにも、頭を下げる気になれません。貴兄の論文をよみながら、我々、哲学などやる者も、大いに努力せねばならぬ、といふ、強

い奬励と反省とを促されました。

實に精密な学問的研究は、其の根底に斯ういふ深い愛を有つことは、研究を生きたものにし、人を学問的に教へることが、同時に、人間として指導するといふ意味を有つことを、強く感じました。

あまり強くうたれましたので、右まで。

（一九四〇年）九月九日　京都にて

天野貞祐

私は天野の羽仁への率直な内容の手紙に深く感銘する。

戦前ファッシズムの強圧の前に「道理の感覚」の自主的絶版を余儀なくされ、沈黙を余儀なくされた天野が、ここに年少の自由の歴史家羽仁五郎の自由と真実を求める叫びの歴史的時代的表現を得て、感動した心情は、まことに純粋で美しい。当時私もまた羽仁五郎の自由と真実の思想より、強い影響を受けた。天野が羽仁に書信を送った翌昭和十六年秋、私は何ものかに憑かれた者のように、南沢の自由学園に所在する羽仁五郎、説子氏宅を訪れた追憶をよみがえらせることができる。日米間の風雲が急を告げており、私たちの徴兵検査も終り、十七年一月郷里の青森・弘前第八師団に一兵卒として入営することが決定していたところであった。いずれ戦場に赴くものとして、死と対決しなければならないが、果してそこで学問と真実を求めるものとして何をなすべきであろうか、問うた時、羽仁は、軍隊においても戦場においてもそのことは充分可能であると力強く発言し、その一例として一冊の書物を示してくれた。それは昭和十二年日支事変当時の戦没勇士の遺稿集「不死鳥」という書物であった。私は昭和十八年三月二十日、機動部隊がトラックへ出撃する前日、軍港呉で日誌に「羽仁先生を通じて、この人生と社会において真摯に生きる確信を持つために、私は先生の『クロオチエ』の深い思索と力強い熱情に励まされ、慰められ、生きてきたことであろう。」としたためている。

これから戦地に赴くものとして、私がまっさきに駆け込んだ人は、東京大学の教師ではなかった。他ならぬ羽仁五郎であった。羽仁は危険思想家として当時特高警察の監視下にあったから、その自宅に出入することは私の身辺と家族の身の上に危険の伴なうことであった。しかし私はそうせざるを得なかった。戦中、私は軍隊にあっても、戦場にあっても、この孤高の自由の思想家、民衆の歴史家、羽仁五郎の力強い激励の言葉を忘れたことはない。

私は天野の羽仁五郎宛の手紙をよみながら、私が戦中、羽仁五郎からの、聯合艦隊司令部附としてトラック泊地において受取った私宛の次の書信を忘れることは出来ない。いま思うと、なんと天野貞祐が羽仁五郎への書信と内面的に酷似していることであろうかと思う。

…今日は日曜である。すでに春である。

壮行以来の大兄の第一信をくりかえしてよみ、大兄の今日の起居如何と思う。想えば、実に大兄の書かれていたように、まさに一年余前の冬の日であった。大兄が大学を卒業して海軍に入られる日を前にして、この南沢を訪れ来ったのは。なぜか、ぼくはそのときのことを想うたびに、そのとき君が〝走って来た〟ような気がするのである。時代の急な走り行く速度を、君は追い越そうとする者のように走って来た。若い君のことだから、息ぎれもせずに、その健康な頬をすこし紅潮させて、そして、君はたしかにこの時代の急な疾走を、君の健康な精神のたゆまざる走力をもって、必らず追いぬいて行くだろうと、そうぼくは信ずるのである。

現在の見地について、君がクロオチェから学ばれたことを知ることは、ぼくにとってうれしいことである。ぼくと同じことをたえず学び深めるために努力している。驚くべく多くの場合に、われわれが〝現在〟と考えるものが、実は、過去である。ぼくは自らしばしばそうした危機を体験したことを告白せざるを得ぬ。幸いにして、ぼくもまた若い走力を失っていない。そのゆえに、まさにそのゆえに、ぼくは大兄の若い健康な走力を同感的に認識し理解し、ふかい敬愛の情をささげるのである。

電通でとった写真ができてきた。シャツができて来た。それらを〝軍艦日向〟にむかって送る。

ぼくらにとって君がそうであるように君にとってぼくらがたえず激励であり、慰藉であり、つねに楽しい心の友であることを願望する。

かわらざる友情の握手をもって　五郎

しかし戦後私は羽仁五郎夫妻を容易に訪ねようとはしなかった。訪ねる気にもなれなかった。私自身この戦いにあまりにも傷つき、家族のものをほとんどこの戦いのために直接間接失い、さて平和の道を求めてなにをなすべきかを問うた時、社会的歴史的な課題として、はじめて移り住んだ北海道地域社会のまちづくり、国づくりに心を向けさせられたのであった。そして内面的な魂の向うべき方向は、日本プロテスタントの指導者植村正久の主導する日本キリスト教会の信仰・カルヴァン派改革教会の信仰に導かれていったのであった。やがて近代日本の原点として札幌農学校の果した役割、内村鑑三と新渡戸稲造の巨大な役割に開眼させられてゆくようになった。

さて自由学園の創立者羽仁もと子・吉一夫妻の信仰と教育理念は、「思想しつつ　生活しつつ　祈りつつ」であったが、羽仁もと子は植村正久よりキリスト教の洗礼を受け、その忠実な愛弟子となった。植村正久の二女植村環牧師も自由学園教授だった時期があった。天野は早くから羽仁もと子の思想・信仰に共鳴してい

たが、文部大臣辞任後自由学園の運営に協力するようになった。羽仁夫妻が相前後して逝去するや後継者の羽仁恵子女史を助け、自由学園理事長として逝去するまで二十数年の久しい歳月にわたって献身した。天野が年少時の内村鑑三への開眼に始まるキリスト教信仰への出発は、私はこの自由学園理事長時代に一つの発展をとげたとみる。自由学園の〝自由〟のよってたつ「眞理は汝らに自由を得さすべし」（ヨハネ書八・三二）の言葉は、天野が好んで使用する聖句となった。自由学園で天野時代より国語の教鞭をとっている神田直人教諭に、自由学園での天野語録を集めていただいたが、実にぼう大であり未発表部分が多く、この時代の天野のキリスト教信仰についての証言として、あるいは一巻の書たり得るに値するかもしれないと感じた。

ただこの時期の天野についてみると、自由学園理事長としてとりしきっていたこの時に、激しく羽仁五郎、説子夫妻の行き方について自由学園とは全く無関係であることを強調しつづけた。それは自由学園の空気を代弁するものでもあったかも知れない。戦前の天野の、羽仁五郎へのあの讃美を思うと、あまりの変化ともいえないでもない。しかしそれは天野が全面的にその思想を変化させたわけでもなかったかもしれない。羽仁五郎が戦後の大きな豊かな自由のもとで、その史観においても政治的立場においても、自からを英雄規してしまい、あまりにも煽動家となりすぎたことへの強い反撥であったともいえないことはない。天野の内面的なカント的な自由と、羽仁の歴史的社会的政治的自由との激しい対立の結果によるものともいえるかもしれない。私が羽仁五郎のもとを訪れようとして出来なくなった直接の契機は、私はこの戦争であまりに傷つき、すぐには立上れない処にあった。一方、生前の羽仁もと子の心情もまた複雑なものがあったように思う。戦後羽仁五郎が参議院議員に立候補するとき、羽仁もと子はその知人に「主義主張においては異なれど肉身の情において忍び得ず」と協力を求める手紙を出している。戦中羽仁もと子の許を訪れた体験を持つ私のところにも、その一通がとどいたことがあった。天野はそうしたことがあったことは、おそらく知らなかったであろう。もし知っていたとすれば、どのような態度であろうか、私は天野の対応をいろいろと推測する。

ともあれ天野貞祐と羽仁もと子・吉一夫妻の友情については、本書においては多くは語ってはいないが、ゆうに一巻の書物たるに値するであろうと思う。

三木清と天野貞祐

羽仁五郎と盟友の哲学者三木清と天野の関係も、運命的であった。

西田哲学門下の鬼才三木清が近づきつつあった昭和二十年八月

十五日敗戦の日を目前に、悲劇的な獄死をとげたのは昭和二十年五月のことであった。三木の戦前の日本思想界に果した役割については、やはり巨大であったという他ない。天野より十歳年少の三木は、同じ西田門下の逸材として早くから西田哲学を継承発展せしむるに足る大器として注目されていたことは周知のところであった。

さて大正十五年朝永三十郎教授が定年退官するに当って、朝永は後任として意中の人、学習院教授の天野にもっぱら交渉を進めた。天野はその任にあらずとして固辞しつづけたが、やむを得ず悲壮な覚悟で助教授就任を引受けた。しかし文学部教授会内部で「基督教の起源」の著者　波多野精一教授は、三木の才能を天野以上に高く評価し、彼を推し、教授会は紛糾した。

天野はそうした教授会内部のことについて全く知らない、知らされてもいない。もし事情を知っていたならば、天野のことである、いち早く助教授就任の件は辞退していたことであろう。しかし朝永の決意が固く、また大学院時代の三木のスキャンダルなどが飛び出したりして三木の文学部への道は断たれ、三木は失望のあまり東京にもどった。しかし法政大学文学部哲学科教授としてやがて日本思想界に登場活躍するようになる。

私は「天野貞祐伝」をとりまとめながら、もし三木清が京都大学に残っていたとしたなら、その後の三木の運命も大いに変ったであろうと思った。しかしまた大東亜戦争（太平洋戦争）は必然的であったから、その戦いに対する姿勢として、三木はその持ち前の思想的態度からおそらく一層の積極性をもって太平洋戦争とその将来について発言するようになったであろうとも思われる。あるいはまたそれ以前に、すでにマルクス主義的傾向を示していた三木の思想的立場からみて、第三の〝京大事件〟を惹き起しかねなかったかも知れず、やがては京都大学を去らねばならなかったのではないか、私はそんなことをいろいろと推測する。

一方、天野の場合も、もし学習院にそのまま残っていたとするならば、今日の天野はなかったであろうと思う。天野はしばしば〝運命〟という言葉を使用してきた。そして天野の生涯のそれぞれの段階はまことに運命的というほかないが、しかし天野の特質は、その自由と責任の立場から、それぞれの運命的な課題を克服しつづけていったその生活態度と決断の中にあったと思う。

天野と三木は、朝永教授の後任講座をめぐって、天野自身の全く知らぬ間に対立し、天野は文学部助教授として受け入れられた。カント哲学研究者としての天野の哲学的才能も抜群であったが、三木はさらにそれを卓越していた。しかし天野の誠実な人間性はついに三木を凌駕した。

私は三木清が敗れて上京十数年後、近衛文麿公を中心とした国策研究機関昭和研究会（主宰後藤隆之助）の理論的指導者として

活躍中、直接指導を受けるようになった。昭和研究会を母胎とした昭和塾に入塾を許可されたのは、経済学部三年の昭和十五年五月のことである。塾は創立三周年を迎えていたが、第二学期に入って、私は三木清を指導者とする文化班を志望した。その所属メンバーは六名で、その一人浅石晴世（中央公論編集者）は後にいわゆる〝横浜事件〟に連坐し獄死し、現在生存者は永末英一（現在民社党副委員長・衆議院議員）と私の二名となっている。三木清は若冠三十歳にして処女作「パスカルにおける人間の研究」（岩波書店）を公刊、京大文学部就職に敗れ、その翌年天野の親友落合太郎教授のすすめによって上京、法政大学文学部哲学科主任教授として日本の思想界に登場、昭和十四年には名著「構想力の論理」を公刊し、三木哲学の名のもとにその名声はとみに高まっていた。やがて三木時代が形成されようとしていた。

さて、昭和十四年昭和研究会の主任講師尾崎秀實がいわゆるゾルゲ事件に関連し、解散に追いやられたとき、三木はその存続を主張し、そのための資産を某所から引きだすことも考えていたほど意欲的であった。しかし昭和研究会は解散し、昭和塾も同じ運命をたどった。

昭和塾文化班で私ども、三木から受けた報告は、「協同主義論」「協同主義の経済」「権威と自由」等であった。三木は当時四十四歳、この天井をあおいで講義する哲学者三木の風貌はさながら野武士のようであった。当時の私は三木の風貌とその著作にあらわれた華麗なる文章と高度の理論構成と結びつけて想像することは困難であった。天野を通じて私は、ありし日の三木清の一面を改めて回想することになろうとは夢想だにし得なかった。

友情―天野・九鬼周造・岩下壮一

天野は「若き人たちへ」において「友情論」を説いた。心術の友情を強調した。天野はその愛読書の「中庸」「論語」からと、「アリストテレス」「ニコマコス倫理学」より多く引用した。そしてつぎのような言葉を教えた。

カントは次の如く教えている、人は友情の名に対して敬意を有たねばならぬ。我々の友が敵となった場合にも以前の友情を尊重し、我々が憎み能わぬことを示さねばならぬ。ひとたび友人であった者を悪しざまに言うことはそれ自体善くないことである。と言うのは人はそれによって彼が友情に対して尊敬を有たぬこと、友人の選択を誤ったこと、今や友人に対して忘恩的であることなどを証明するからである。のみならず、それは聡明な仕方にも反している。何故と言うに以前の友人の悪口を聞かされる人は、彼自身も友人となったのち不和になるならば同じ目に会うと考えて友情を成立せしめぬからである。

天野は、いずれも平凡な教訓だが味わうべき言葉であると思う

と述べている。「友情論」をこのように展開した天野は、単にそれだけに終らず、その生涯において得がたい友情の体験を積み重ねた。一高時代に得られた実存哲学者九鬼周造とカソリック教界の輝ける明星とうたわれた岩下壯一神父との交友がそれであり、三人の交友の歴史は明治、大正、昭和年代を通じて輝ける友情史という他はない。それだけで何と魅力的な主題ではあるまいか。誰れかそれを記すものが出ないであろうか。

さらに附け加えると、戦後森戸辰男との友情、また前述の自由学園創設者羽仁とも子・吉一夫妻との友情もまた軽視することが出来ないであろう。

三人の友情の接点は、何にあったのか。

九鬼周造年譜をみると、「一九〇六（明治三十九）年十八歳七月『歴史』の及第点がとれず落第。天野貞祐、岩下壯一と親交を結ぶ。彼等との友情は終生変わることがなかった」としるされている。「当時一高には落合太郎、児島喜久雄、辰野隆、谷崎潤一郎、和辻哲郎などがいた」としるされているが、稀有の人材を輩出したクラスであった。天野、九鬼、岩下三人を結びつけた接点は、早くより人生の悲しみを体験していた同情からであったろう。天野は中学時代に最愛の母をなくしていた。それは天野の生涯において最も悲しかったことであった。九鬼もまたその母と離別した。父と母が離別し、九鬼も幼年時父のもとで孤独な生活を過した。岩下もまた父母を早くして亡くした。そうした似通った環境の中で、三人とも同じく哲学という共通の目標に向って、学問と人間形成に励んだ。そこに岩元禎という哲学者が立っていた。また天野も九鬼も学校生活において少なからず挫折感を味わっていた。三人ともその理想は、キリスト教に近づいてゆくことであった。天野は無教会主義の内村鑑三の確信に導かれていった。「勇ましく高尚なる生涯」がそれであった。九鬼は大学生時代東京神田聖フランシス・ザビエル教会においてカトリック教の洗礼を受けていた。岩下はすでに周知の熱心なカトリック信者であった。

天野は大正四年（一九一五）三十一歳の時、次兄康虎の未亡人タマと結婚した。不思議なことに九鬼も三年後次兄一造の未亡人縫子と結婚しているのであった。天野の場合はタマ夫人との結婚は生涯にわたったが、九鬼の場合その結婚は破れ、新たな住居を自ら創設し、祇園の芸妓中井嬢と同居することになった。

一九四〇（昭和十五）年十二月、岩下壯一は死去（享年五十一歳）した。翌十六年五月、後を追うかのように九鬼周造が死去した。享年五十三歳であった。天野は二人の最後を看取りつつ、戦後四十年、一九八〇年（昭和五十五）年三月六日死去した。享年九十五歳であった。天野の尽力により、天野貞祐、澤瀉久敬、佐藤明雄三人の編集による「九鬼周造全集」（岩波書店）全十二巻

の刊行が開始されたのは、天野の死後の翌年である。

また天野は生涯の最後にカトリック教に入信したが、そのときに岩下神父の令妹清が奉仕した。清はかって若き九鬼周造が思いを寄せた人であったといわれる。

私は天野、九鬼、岩下三人ともに実際お会いしたことはない。ただ不思議なことに、天野が学園長・十三代校長として指導した目白の獨協中学校・高等学校に十六代校長として四年間その職にあった。なお九鬼周造の名はその著書「巴里心景」によって早くより知った。九鬼の詩歌集「巴里心景」が天野編集、児島喜久雄装幀、挿絵により甲島書林より刊行されたのは、昭和十七年十一月のことであった。その翌十八年十二月末、海軍少尉でたまたま戦艦武蔵を降り、館山海軍砲術学校附教官を命ぜられた機会を利用し、札幌の石田百合子と結婚することになった私は、僅かの時間を活用して札幌に旅立った。そして札幌の丸善書店で私が買い求めて彼女へ贈った書物が「巴里心景」であった。その書物はまた学生時代の私の初恋の対象そのもの—巴里—を象徴してもいたのであった。

天野、九鬼、岩下三人の青春を想い起しつつ、私は私自身の青春はなんであったのかと、思いを重ねてみた。

その当時の日誌の一部に次のような記録がある。

…それは湘南地方のある海辺、それは湘南の蒼空の下、私はかねがねパリにゆきたい、パリにゆきたいと、彼方の海と空ばかり眺めては胸を焦がしていた。すべてはその幻想の産んだものかもしれなかった。西欧の精神が、郷愁のように私の心をしっかりとらえて離さなかったのだ。

私の初恋の対象はフランスであり、パリであり、そのなかに息吹するであろう良識（ボン・サン）であった。

その五年前、私は旧制浦和高校の二年だった。春カトリック研究会への参加をすすめられた。指導者は当時、浦高武原寮委員長をしていた三年理甲の相馬信夫（現カトリック教名古屋司祭）であった。彼のすすめで、皆と当時東京帝国大学法学部教授の田中耕太郎博士宅を、秋のある晩訪問したことがある。この時はじめて、時代のファッシズムへの急激な傾斜と大学の自治と学問の自由に対する内外からの激しい攻勢の嵐の中で、東京帝国大学法学部における自由主義の最後の砦といわれている、この信念に燃えているカトリック教徒としての田中教授に面接し、私はただ我を忘れて感動した。岩下壯一神父の輝かしい名を耳にしたのは、この時であった。それ以来私は岩下の名前を忘れない。後に相馬の紹介により世田谷区喜多見の利光鶴松氏(小田急電鉄社長)宅で家庭教師をすることになったが、熱心なカトリック信者であった同家で私はしばしばカトリック教会へ通わされたことを追想する。

天野は「忘れえぬ人々」のなかで、九鬼、岩下について多く触れている。両人の死後も、天野の脳裏を消え去らなかった両人であった。この卓越した九鬼も岩下も、天野の長年月にわたる生涯の追憶によって、ますますその精神を歴史の上に輝かし得た一面があったのではなかろうかと思う。

京都学派と天野貞祐

天野は京都帝国大学文科大学創設時、桑木嚴翼博士の声望に惹かれて、はじめて京都に旅立った。明治末期当時は、やはり旅といえるものであった。三木清は西田幾多郎博士を慕って京都に赴いた。そして私の海軍時代の友矢内原伊作は田辺元博士の許で哲学を学んだ。三人とも一高出身の俊英であった。京都学派といわれる京都大学文科大学は、まさに学問のメッカであった。

天野は学生生活を終え、七高・学習院教授を経て京都にもどった。

天野が京都帝国大学教授として、西田、田辺、波多野教授などの独創的な学者・思想家のなかでどのような学問的および主体的な位置づけをなされていたか、また濱田総長時代、名学生課長としてどのような役割を果したか、「京都大学文学部五十年史」によると、次のように簡明にしるされている。——

天野貞祐教授が、和辻教授の東大轉任の後をうけて、哲學哲學史第四講座から轉じて、本講座を擔任するようになったのは昭和十年三月であった。天野教授は元來カント哲學研究の權威であり、その第一批判の名譯は、つとに難解な本著作の讀解に必須の文獻であったが、さらに教授のカント實践哲學の根本精神である倫理的ヒューマニズムに對する深い共鳴は、その學問的立場を根本的に特徴づけるものであったといえよう。そしてさらに重要なことはそれが教授の學問的特質であったのみならず、その人格的背景を形成したことである。

このようにして本講座はこの學問の本質の一面である實践的情熱の主體性を獲得して、さらに新たな出發を始めることとなった。天野教授の背景たるヒューマニズム的合理主義の精神は、現實の不合理と醜雲をそのまま第三者的に傍觀し看過することを許さず、ついに筆を驅って、『道理の感覺』(昭一二)、『學生に與ふる書』(昭一四)、『道理への意志』(昭一四)などの諸著を相ついで公刊するに至った。これらがわが國の青年知識層の純粹な魂の上に、いかに大きな感激の波紋を呼び起したかは何人も知るところであろう。哲學的眞理が單に客觀的體系の眞としてのみ把握されるものでなく、深く行爲的個體の主體的眞實を中に含むものとして把握されなければならないことを考えるならば、教授のカント哲學に對する態度は、まさにこの眞理の人格的把握のいかなるものかを教えるであろう。教授のヒューマニズムは、一面道理の

力の不動の確信に基く嚴しさを含むと同時に、他面豐かな人間性の完成を強調する柔軟性を特質とし、同時にそれは人間性の擔い手としての各個人の自律性と、單に手段としてのみならず、目的としての個人の絶對的價値を強調する個人主義を必然的に伴なう。しかるにこのような近代的ヒューマニズムと個人主義は、戰前の軍國主義的、國家主義的日本社會と本質的に相容れぬことは明白で、教授の立場は一面普遍的人間理性の立場であるとともに、他面民族の文化と傳統を尊重するが、しかしそれは文化的倫理的立場に終始するが故に、當然現實的政治的不合理と衝突せざるを得なかつた。とくに滿州事變以後のわが國における軍部勢力の擡頭と、それを支持する右翼的國家主義の勃興は、教授をして祖國の前途に深憂をいだかせ、昭和九年における高田保馬教授との貧乏論の應酬はその時流に追隨しない高邁な識見の一表明であつた。さらに昭和十三年には『道理の感覺』中の軍事教練に對する批評が、反軍思想であると軍當局を刺激し、大學との間に紛爭を惹起するに至つた。當時は濱田耕作教授の總長時代で、天野教授は總長の懇請により學生課長に就任していた。濱田總長は教授を深く信頼支持するとともに、教授も自說の正しさについて強く信ずるところがあつたが、結局右著作の自發的絶版という處置は、總長の毅然たる態度と、當時の本學配屬將校川村大佐の理解ある處置と相まつて、事件を圓滿解決させた。しかし教授のヒューマニズム的人格主義的信念は、その獨自の祖國愛とともに、戰前戰後變轉極まりない世相の中にあつて、終始一貫してついに變わるところがなかつた。

天野教授は「自由の問題」(昭一〇)、「人格論」(昭一一)、「德目について」(昭一二)、「意志自由の問題」(昭一三・一四)、「人倫の形而上學試論」(昭一五)、「同情の倫理」(昭一六)、「良心に就いて」(昭一七)、「ヘーゲル法哲學考察」(昭一八)について特殊講義をし、演習は「Hegel, Grundlinien der Philosophie des Rechts」(昭一〇—一二)、「Kant, Kritik der praktischen Vernunft」(昭一三・一四)、「Hegel, Grundlinien der Philosophie des Rechts」(昭一—五一七)を讀んだ。

天野教授は昭和十九年十一月停年のため退官し、代つて二十一年三月に島芳夫助教授が教授となつて本講座を擔任し、以來今日に至つている。島教授は昭和十一年講師、十六年助教授に任ぜられて講義を續けていた。——

天野が正當に、いな好意的に評価されているのは、この時代だけであろう。そしてこの時代に天野は学者として、また短期間ながら大学行政家として最も充実した日々を送った。

わが父・母と天野貞祐

私はまだ多くの視点から「天野貞祐における人間研究」ノート

を綴りたいが、紙幅の関係もあり、また「天野貞祐―教育九十五年・勇ましく高尚なる生涯」（仮称）も公刊されることでもあり、ここで割愛することにしたい。最後にわが父母と天野の視点から、幾つかの臆測を交えつつ書き留めておきたい。

もちろんわが父・母と、天野・夫人とは全く何らの関係はない。面識もない。ただ共通していることは、父は明治十六年生れで天野より一歳年長であり、母は二十年生れで天野夫人と同年で、したがって明治の同じ世代に誕生している。郷里は青森・東津軽郡平内という山村の出身で、山国という点では共通性があるが、他面父も母も全くこの世の教育というものを受けていない。その点では百八十度天野夫妻と異なっている。そうしたためであろうか、その後のわが国の社会的歴史的な現実の中での、その生き方に根本的に違ってきている点が、私にはきわめて印象的であった。

父浅吉は、明治十六年一月、蝦名三助・おりの次男として平内町内童子部落に生まれた。その部落は明治九年に戸数五三、隣接の田茂木は二九という山村の小部落であった。十一年には早くも内童子小学校が設立された。現在改築されたが、創立百年の古い学校で、私も小学校三年まで在校していたことになる。学校は村で唯一の公の施設であった。それは自然に、村民の生活の中心に置かれるようになった。また村民はいつしか学校の教育―子供たちの教育を中心に考えるようになった。父は二十三年にこの学校に入校したが、ほとんど登校せず、学校へいくといっては、川原へ逃げ出して魚獲りに熱中していたという。また当時の農家は極貧の状態にあったから、家庭でも生活が先きでそれほど教育に対する必要性も配慮も認めてはいなかったようだ。だから父はろくに文字を書くことが出来なかった。母あぐりは南津軽郡猿賀村の出身で、全く学校に行っていなかった。しかし――私はこのことを特にしるしたいのだが――上級の学校にも上れず、そのことを考えたことも全くなかった父は、無教育であっても、いやそのために明治三十七、八年に日本の命運を決する日露戦争には一兵卒として弘前第八師団の出征とともに、満州の広野に投げ出されたことであった。その時長兄磯吉も従軍している。三男の浅五郎も従軍する筈であったが、当時父母をみとる人がいるということで兵役を除外された。私の太平洋戦争の時と何と異なることであろう。わが兄弟は四人ともこの戦いに参加させられたのだ。父もその兄も日露戦争を左右した奉天の会戦にまで参加し、両人は奇跡的に生還した。

父はよくこの奉天の会戦の模様と、広い原野の真っ只中を行方も知れずにさまよっていたとき、偶然に兄と出会った驚きと喜びを、幼い私達に話してくれた。しかし父は生還したといっても、戦争中最大の激戦地であった黒溝台での戦闘中、敵の散弾が口中に突入、さらに腹部にまで達したまま戦場で倒れ、野戦病院に運

ばれた後、急きょ内地に送還され、弘前の陸軍病院に移送された。そして戦後そこで七年に及ぶ闘病生活を送り、ようやく明治末期に社会復帰することが許された。傷痍軍人となった父は、前歯が二、三本しかなく、友人から〝歯っかけ〟といわれた。自分でもそういった。しかし父はそのことを誇りとした。そのために、傷痍軍人として特別の恩典をうけることになった。それは一カ月に二週間の全国鉄道無料パス（付添人を必ず一名つける）を使用することと、僅かな年金を与えられたことであった。父は出征前結婚し、長男が生まれたが、戦後母は病死し、後妻をめとった。私達の母である。母もまた再婚であった。私達兄弟は男四人女三人であった。

わが名もない家族の歴史は、明治・大正・昭和の三代にわたって、日露戦争、第一次大戦、そして昭和の満州事変、日支事変、太平洋戦争のぼっ発とともに、父も長兄元八も次兄賢一も、三兄熊夫も、そして私も含めて次々と戦争に動員された。わが父・母の切なる願いは、わが子たちがただ戦争で死なないように、武運長久を祈るだけの長年月の苦難の日々であった。私は天野の記録をとりまとめながら、その人間形成と思想形成の中で、天野が直面した日露戦争などのぼっ発に際しての青年としての考え、視点が全く欠除していることに、どういうことであろうか、と思ったりした。日露戦争当時はまだそれだけ余裕があったといえばいえるかもしれないとも考えたりした。私達の青春時代は、戦争とファッシズムの暗闇時代であって、戦争を除いて学問も人生の生き方も考えられはしなかったのであった。

天野が獨協中学校・高等学校の校訓として残したものに、〝教育愛〟という言葉がある。当初私はこの言葉の意味が充分飲み込めなかった。しかしいま四年にして、この言葉の意味を充分理解する。そして私は、我が名もない家族の歴史も、父と母の〝教育愛〟からはじまったと考えるようになった。それは、明治、大正、昭和と三代にわたる百年の長い一庶民の歴史でもあったと思う。その過程ではぐくまれた〝教育愛〟とは何んだったのか、私は現在高齢期に入り、父母に育くまれた歴史を記憶の糸を手繰りながら考えてみたいと思った。それも天野の〝教育愛〟に触発されてのことであった。天野によって、父母の〝教育愛〟の問題を考える直接的な契機を与えられたことにもなったのである。すでにその一部は「若き友へ」にしるしている。

しかし私の記述の仕方は、天野のそれとは必ずしも同じではない。私の現在の心情をよくいいあらわしている言葉に、次の「家伝学問のすすめ」がある。私の畏友であり、無名の、市井の哲学者・モラリスト・成ケ沢宏之進の言葉である。私は著述に当って、しばしばこの人のコラムよりの感化を受けとめ、反すうしつつ筆を進めてきた。

家伝学問のすすめ

無学と世の人の言う家に教育あり

無学と世の人はあざけりの気持をこめて口に出す。だが、その言葉には大きな誤りがある。世の人の唱える学問とは、学校制度の課程であり、真の教養や学問ではない。

無学の母に育てられたその人は、世の人に尊敬される気品と教養を身につけた。それは学校教育にない家伝の学問であった。

学問の真髄は人たる道と、生き方であって、単なる知識ではない。子孫を立派な人間に仕上げたいと願うなら、家に古典名籍を残そう。子孫に伝える記録と教えを残そう。家伝の学問で子を育てよう。

成ケ沢宏之進「道」

—食品流通経済第二五二号—

あとがき

この一月十八日、偶然なことに私は京都を訪れることが出来た。獨協中・高校の小川正城教諭が京都グランドホテルで京都の福山万寿美さんと結婚されることになり、その披露宴に招かれたのであった。その祝宴は十九日午後四時からであったが、その日曜日の朝、私はかって天野が学び、後教壇にたった京都大学をもう一度新たな眼で確めたいと思ったからであった。珍らしくうららかな冬の一日であった。静かなたたずまいの大学の構内であり、文学部の旧館はそのままであった。私はこの一時の滞在を楽しみ、天野が研究し、教育に精進したありし日を偲んだ。

結婚式の終った翌日、私は東本願寺を訪れた。かって大正十五年の秋—小学校三年で上京した年だったが—父に連れられて訪れた寺院であった。父はその父三助が若かりし時、おそらく幕末の頃であろうか、親鸞上人の教えに惹かれて、郷里津軽より徒歩で京都に辿りつき、三年の間この寺院で奉仕修業したことがあったと語ったことを想い起した、その祖父は果してどんな人であったのか、今となっては解き明かす手がかりは全くない。

私は〝古都〟で、天野の教育愛と無学平民の父の教育愛とを対照的に追想せざるを得なかった。またこの獨協四年の生活の中で、あまりにも多くの父母の教育愛の多様さと真剣さと異常さに触れ、一体教育愛とはなにかと昏惑せざるを得なかった。私の複雑な胸中を出来るだけ文章で残そうと思ってまとめられた一冊は既述の「天野貞祐伝」であり、他の一冊はまだ構想中にすぎないが「わが父と母と教育愛」（仮称）と題するものである。私の天野研究ノートもこの稿をもって終りとする。

〈資　料〉

天野貞祐年譜

蝦名賢造編

年号	年令	略歴
一八八四(明治一七)		・九月三十日、神奈川県津久井郡鳥屋村に、天野藤三・タネの第五子四男として生まれる。
一八八九(明治二二)	五	・藤三、鳥屋村村長となる。
一八九〇(明治二三)	六	・十一月二十二日、祖父四郎助逝去。
一八九一(明治二四)	七	・鳥屋村小学校入学。
一八九四(明治二七)	一〇	・藤三、補欠選挙で県会議員に選出される。
一八九五(明治二八)	一一	・七月、日清戦争。
一八九七(明治三〇)	一三	・十月二十七日、祖母ハル逝去。
一九〇一(明治三四)	一七	・獨逸学協会中学校入学。
		・野球試合で足を捻挫、休学。
		・八月二十三日、母タネ、チフスにて逝去（四十五歳）。
一九〇六(明治三九)	二二	・中学退学。
		・四月、獨逸学協会中学卒業。
		・八月、第一高等学校文科入学。
一九〇九(明治四二)	二五	・第一高等学校文科卒業。
		・京都帝国大学文科大学哲学科入学、桑木厳翼博士の指導を受ける。
一九一三(明治四五) 大正	二八	・京都帝国大学文科大学卒業。
		・卒業論文「物自体の問題」。

年号	年令	略歴
		・大学院入学、哲学研究室副手嘱託。
		・カント「プロレゴーメナ」（哲学序説）の翻訳を始める。
一九一三(大正二)	二九	・論文「カント学徒としてのフィヒテ」を文学会雑誌〈芸文〉に発表。
一九一四(大正三)	三〇	・第七高等学校ドイツ語講師。
		・桑木博士共訳「プロレゴーメナ」（東亜堂）出版。
一九一五(大正四)	三一	・第七高等学校教授。
		・青木タマと結婚。
一九一七(大正六)	三三	・一月七日、長男誠一誕生。
一九一九(大正八)	三五	・一月十日、長女カズ誕生。
		・学習院教授に転出。
		・カント「純粋理性批判」の翻訳に従事する。
一九二一(大正一〇)	三七	・カント「純粋理性批判」上巻、翻訳公刊（岩波書店）。
一九二三(大正一二)	三九	・ドイツ留学、ハイデルベルグ大学に学び、もっぱらリッケルト、ホフマン両教授の講義を受講。
一九二四(大正一三)	四〇	・病気のため一年半の留学期間を半歳短縮して

年号	年令	略歴
一九二六(大正一五)	四二	帰朝。
昭和		・八月、京都帝国大学文学部助教授。
一九二八(昭和三)	四四	・三月八日、父藤三逝去（七十四歳）。
一九三〇(昭和五)	四六	・カント「純粋理性批判」下巻の翻訳完了、公刊（岩波書店）。
一九三一(昭和六)	四七	・京都帝国大学文学部教授（西洋哲学）。 ・文学博士を授与される。
一九三五(昭和一〇)	五一	・倫理学講座担任。 ・「カント純粋理性批判の形而上学的性格」(岩波書店）出版。
一九三七(昭和一二)	五三	・「道理の感覚」（岩波書店）出版。
一九三八(昭和一三)	五四	・九月、大学学生主事学生課長。
一九三九(昭和一四)	五五	・「道理の感覚」を自発的に絶版とする。 ・「学生に与ふる書」（岩波書店）出版。 ・甲南学園理事長平生釟三郎の要請により、甲南高等学校顧問として校長代行をつとめる。
一九四〇(昭和一五)	五六	・「道理への意志」（岩波書店）出版。 ・岩波講座「倫理学」編集顧問。
一九四一(昭和一六)	五七	・「私の人生観」（岩波書店）出版。 ・岩波講座「倫理学」に「人倫の形而上学序論」発表。
一九四四(昭和一九)	六〇	・十一月、京都帝国大学教授退官。 ・十月九日、甲南高等学校長に就任。
一九四六(昭和二一)	六二	・「信念と実践」（岩波書店）出版。 ・第一次アメリカ教育使節団、日本側委員。

年号	年令	略歴
		・教育刷新委員会委員。 ・甲南高等学校校長を辞任。
		・二月九日、安倍能成文相就任のあとを受け第一高等学校校長に転出。
		・十二月、一高東大合併決定、天野、辞意表明。
一九四七(昭和二二)	六三	・二月、第一高等学校校長辞任。
一九四八(昭和二三)	六四	・日本育英会会長（二五年まで）。 ・九月、京都大学名誉教授。
一九四九(昭和二四)	六五	・「生きゆく道」（細川書店）出版。 ・「若き女性のために」（要書房）出版。 ・日本学生野球協会会長（三七年まで）。
		・「人間の哀しみ」（アテネ文庫弘文堂）公刊。 ・「教育試論」（岩波書店）公刊。
一九五〇(昭和二五)	六六	・「如何に生くべきか」（雲井書店）公刊。 ・文教審議会委員嘱託。 ・五月六日、吉田第三次内閣に文部大臣として入閣。 ・八月十四日、文部省、新学期から完全給食の実施を発表。 ・十月十七日、文部省、祝日に国旗掲揚「君が代」斉唱をすすめる通達を出す。
		・十一月七日、天野、修身科復活と国民実践要領について発言。 ・「真実を求めて」（雲井書店）公刊。
一九五一(昭和二六)	六七	・「今日に生きる倫理」（要書房）公刊。 ・二月七日、天野、衆議院で「静かな愛国心」

年号	年令	略歴
		の必要性を説く。
		・五月、自由学園創立三十周年式典に出席、文部大臣として祝辞。
		・「スポーツに学ぶ」（細川書店）出版。
		・十一月十二日、天野「国民実践要領」の大綱発表。
一九五二（昭和二七）	六八	・十一月二十七日、参議院文教委員会で論議、天野、撤回を表明。
		・「日々の生活」（中央公論社）出版。
		・八月十二日、文部大臣を辞任。
		・十二月二十七日、第十三代獨協中学校・高等学校長に就任。
一九五三（昭和二八）	六九	・三月十日、「国民実践要領」（酣灯社）公表。
		・十月二十二日、獨協創立七十周年祝賀式。新校舎の地鎮祭施行。
		・中央教育審議会委員委嘱。
一九五四（昭和二九）	七〇	・「忘れえぬ人々」（河出書房）出版。
一九五五（昭和三〇）	七一	・「日々の倫理」（酣灯社）出版。
		・中央教育審議会会長（三八年まで）。
		・ドイツ連邦共和国より星付大功労十字勲章を贈られる。
一九五七（昭和三二）	七三	・自由学園理事長。
		・「高校生のために」（東西文明社）出版。
一九五八（昭和三三）	七四	・「新時代に思う」（東京創元社）出版。
		・文化功労者選考審査会委員（三五年まで）。
一九五九（昭和三四）	七五	・日本連合教育会会長に推挙される。

年号	年令	略歴
一九六〇（昭和三五）	七六	・天野貞祐著作集全五巻（塙書房）刊行。 一「人生論」 二「教育論」 三「若き人たちへ」 四「忘れえぬ人々」 五「随想録」
一九六一（昭和三六）	七七	・文化功労者受賞。
一九六二（昭和三七）	七八	・日本学生野球協会名誉会長。
一九六三（昭和三八）	七九	・獨協大学の創立に踏み切り、設置を認可される。
		・「天野貞祐集」（現代知性全集・愛蔵版）（日本書房）公刊。
一九六四（昭和三九）	八〇	・四月、獨協大学初代学長となる。（外国学部、経済学部）
		・国立教育会館長兼務（四二年まで）。
一九六五（昭和四〇）	八一	・「栄典に関する有識者会議」構成員。
一九六七（昭和四二）	八三	・国立教育会館長辞職。
一九六九（昭和四四）	八五	・五月三十日、大学紛争により、獨協大学学長辞任を表明。
一九七〇（昭和四五）	八六	・獨協学園長、獨協中学・高等学校名誉校長に推戴される。
		・九月、天野貞祐全集全九巻、栗田出版会より公刊される。（四七年一月完結）。 第一巻「道理の感覚」（四六年三月） 第二巻「学生に与ふる書」（四六年五月） 第三巻「信念と実践」（四六年一月）

年号	年令	略歴
		第四巻「今日に生きる倫理」（四五年一一月） 第五巻「教育論」（四五年九月） 第六巻「道徳教育」（四六年九月） 第七巻「カント研究」（四六年七月） 第八巻「純粋理性批判」上（四六年一一月） 第九巻「純粋理性批判」下（四七年一月）
一九七一（昭和四六）	八七	・NHK放送文化賞受賞。 ・五月、自由学園創立五十周年、理事長としてあいさつ。
一九七三（昭和四八）	八九	・勲一等旭日大綬章受章。 ・四月、獨協医科大学創立される。 ・野球殿堂入りをする。
一九七四（昭和四九）	九〇	・「教育五十年」（南窓社）公刊。 ・竹中育英会顧問。
一九七五（昭和五〇）	九一	・日本連合教育会会長。 天野、名誉会長に推挙される。
一九七九（昭和五四）	九五	・「わが人生」（自由学園出版局）公刊。 ・天野夫妻、カトリックに入信。
一九八〇（昭和五五）	九六	・三月六日、九六歳の天寿を全うし逝去。 ・三月七日、カトリック吉祥寺教会にて密葬。 ・三月二十五日、獨協中学・高等学校にてお別れ式、午后一時より東京カテドラル聖マリア大聖堂にて獨協学園葬（司式、ペトロ白柳誠一大司教）。従二位銀杯下賜される。 ・十一月、天野等の編集による「九鬼周造全集」（岩波書店）全十二巻の刊行開始。

〈紹介と書評〉

小松芳喬著『鉄道の生誕とイギリスの経済』

久慈栄志

本書はイギリス社会経済史、とりわけ交通史研究の権威である著者が、永年の研究成果と、現在の経済史研究の方法論とをからめながら、鉄道出現の歴史的過程とその意義を論じた五〇〇頁に及ぶ大著である。

従来、かかる分野の研究はいわゆる好事家の手によるものが多く、それゆえに学問的体系まで至らなかったり、又は専門的内容にもかかわらず、社会への貢献度がきわめて希薄で、研究の意義すら問われるものが少なくなかったことは否定できない。

「社会史」が論じられて久しいが、本書も社会史研究の一分野として捉えてよいだろう。随所に、単に趣味の世界に留まることなく、社会科学として交通史研究を位置づけようとする著者の意気込が感じられる。

本書の構成は次のようになっている。

序　章　産業革命と運輸革命
第一章　鉄道前史
第二章　ストクタン―ダアリンタン鉄道
第三章　リヴァプウル―マンチェスタ鉄道
終　章　経済史上の「鉄道時代」

本書の大部分は、ストクタン―ダアリンタン鉄道及びリヴァプール―マンチェスタ鉄道の鉄道史研究であり、序章と終章はメイン・テーマの内容を補完する役割に過ぎない。従って第一章よりみてゆくこととする。

（第一章）

著者はこの章で、近代的鉄道の特質として次の四点を挙げている。すなわち「特定の線路」、「機械力による牽引」、「公共輸送の便宜」、「旅客輸送」で各々について、鉄道以前の状況を示し、鉄道の有用性を論じている。

鉄道と道路の決定的差異は鉄道が、運行経路上に特別のレールが独占的に敷設される点にあり、「特定の線路」たるゆえんである。レールそのものも、十六世紀に見られる木製レール、さらに木のレールを鉄板で包み込んだものを経て、全鉄製レール（十八世紀末期）へと変遷している。さらに馬車鉄道のように馬などの

動物ではなく機械による牽引を強調している。これは鉱山等で既にみられた人力又は動物によって綱を巻き上げる方式ではなく、蒸気機関車による牽引を意味している。つまり、一カ所固定式から移動牽引方式への発展が近代的鉄道の指標となっているのである。

公共性に関しては、鉱山鉄道(軌道)の如く、特定の目的の為、利用対象者が限定されるのではなく、〃不特定多数の旅客が、目的を問わずに利用しうる〃段階を〃近代〃の目安としている。ここで評者としては幾分、物足りなさを覚える。それは、産業革命時において、イギリスで鉄道と並び急速に整備されつつあった運河との関連が欠如している点である。また、なぜ馬力(畜力)ではいけないのか、機械による牽引に対する民衆の期待度、需要度、必然性が明確に提示されていないことも気になるのである。「馬の飼料である穀物価格の高騰」(69頁)のみでは、経済的説明としてはいささか説得力に欠けるのではないか。

(第二章)

一八二五年九月二七日、ついに開通式を迎えたストクタン―ダアリンタン鉄道について、建設に至る道のり、会社設立、そして開通式当日の様子など実に詳細な記述がなされている。

一八二一年春の国会審議において「ダラム州の奥地から(中略)石炭、鉄、穀物、その他の貨物を輸送するのが容易になり、しかも逆方向の商品輸送も容易になるので、付近にある所領の進歩に資するであろう」(112~113頁)として可決され、当該地方の地主、商工業者らによって会社設立の運びとなる。

さて、開通式当日のもようは、豊富な写真、図版、絵等を使用することにより、視覚を経て鮮明に読者へ伝えられている。シルドン駅では、見物人の長蛇の列、ブラスバンドの演奏、教会の鐘、列車に試乗する人々の歓声などが、またダーリントン駅での石炭の貧民への支給、終着ストックトン駅での国歌演奏、数万の群衆による万歳三唱、夜の大宴会等々が著者の名文と図版によって浮びあがり、社会史、技術史分野における、写真、図版の有効性の高さを知らしめたと言えよう。

しかし、著者はこの鉄道への評価を「近代的鉄道生誕直前の過渡的存在」(144頁)と下している。その理由として、経営の未熟さ、蒸気機関車の不完全さ、複数の馬車鉄道業者に対し、有料でレールの使用を認めた、ことなどを挙げている。以上の点から、最初の近代的鉄道は「リヴァプール―マンチェスタ鉄道である」(183頁)と結んでいる。

(第三章)

前章以上に詳細な叙述であり頁数からみても第三章が本書のお

よそ半分を占めている。

本章では、国会における法案通過から会社設立に至るまでの紆余曲折、開通式（一八三〇年九月一五日）とその当日のハスキスンの横死という一大ハプニング、開通後の経営状況そして、一八四五年に、グランド・ジャンクシャンへの合併までの歴史を扱っている。内容がきわめて多岐にわたる為、紙数の都合上、個別的顕彰は避けるが、一八二五年の国会での審議において、既存の水運業者と地主の強い反対により、鉄道法案が流れ、二六年にようやく条件付き（リヴァプール市中での蒸気機関車の使用禁止）で認められたこと。また、開通式当日、建設促進に尽力し、自由貿易を主張していた国会議員ハスキスン（William Huskisson）が誤って線路上に降り立ち、機関車に脚をひかれ九時間後に死亡する事件などが印象に残った。同鉄道会社のその後の経営はきわめて順調に進み、経営の公開、合理化にも努め、ランカシャー地方の旅客、貨物の新規需要を喚起せしめたのである。

さらに同鉄道会社は、営業規模拡大の為、一八四五年に、バーミンガムとリヴァプールを結んでいたグランド・クシャンと合併、翌四六年には巨大会社ロンドン&ノース・ウェスタンレイルウェイが誕生することとなり、まさに鉄道時代の到来を迎えたのである。

さて、本書は評者が冒頭で述べたように、初の本格的な鉄道史研究書といえる。ことに第二、第三章では、膨大な量の原資料、論文が引用され、註も詳細で親切である。

また、文中には種々の統計資料が使用されており、計量経済学の方法論が、社会史分野へも深く浸透していることがうかがわれる。

最後に雑感を一言加えるとすれば、本書があまりにも忠実なまでに事実の再現に終始した為、意義なり、背景等の掘り下げに甘さが感じられた。そして、もう一つ。鉄道開通式における乾杯数まで記載する必要があるだろうか。若干の疑問を覚えた次第である。

とはいえ、かかる課題が、本書の価値を何ら低めるものではなく、著者の多大な研究努力に敬意を表したい。読者諸兄に是非一読をおすすめしたい書である。

（財団法人清明会・清明会叢書、一九八四年十月刊）

習でなく，ドイツの都市，そこでの生活を体験することによって生徒への教授法を研究する点に意義があった。

シュピンネル家では100年前の資料が昨日のもののように保存されており，それに出会ったときは感激のあまり興奮してしまった。シュピンネル家でもシュピンネルが，獨逸協会学校で教鞭をとり，重要な地位にいたことなど，殆んど知らなかった。シュピンネルの子孫に彼の100年前の日本での活躍の一端が紹介できたことをうれしく思う。今度の資料を分析し，本学園史のドイツ語関係の研究の出発点としたい。

参考文献

○岩波西洋人名辞典（1981，岩波書店）

○来日西洋人名辞典（1983，紀伊国屋書店）

○日本に於ける自由基督教と其先駆者―普及福音教会五十年記念（三並　良）文章院出版部―（昭.10）

○独逸普及福音新教伝道会の成立からその日本伝道開始までの事情について（堀　光男）―東洋大学紀要（教養課程編）17（昭.53.3）

○独協百年（1～5）獨協学園百年史編纂室（昭.54～昭.56）

○目でみる独協百年　獨協学園百年史編纂室（1983）

○お雇い外国人（1976．鹿島出版会）

一般市民に対しても重要な役割を果していたことを物語っている。

夕食の卓を囲みながら Regula 女史は次のような興味ある話をしてくれた。

Spinner という家名はドイツ語の spinnen に由来している（spinnen は〈糸を紡ぐ〉という意)。Spinner 家はその昔，Zürichsee（チューリッヒ湖…Zürich の町から郊外に拡がる広大な湖）の裏の山奥に住んでいて，自分の家でつくった製品を山奥から出てきて，湖を船で渡りながら Zürich の町に売りに行ったそうだ。この家や地所は，Wilfried Spinner が，外国（日本も含め）から帰国したあと1914年に手に入れた。

Spinner と言う名前はドイツ語では変人(?)（Idiot)の意味があり，よくからかわれた。Spinner という姓名はスイスでも非常に少ない。等々，

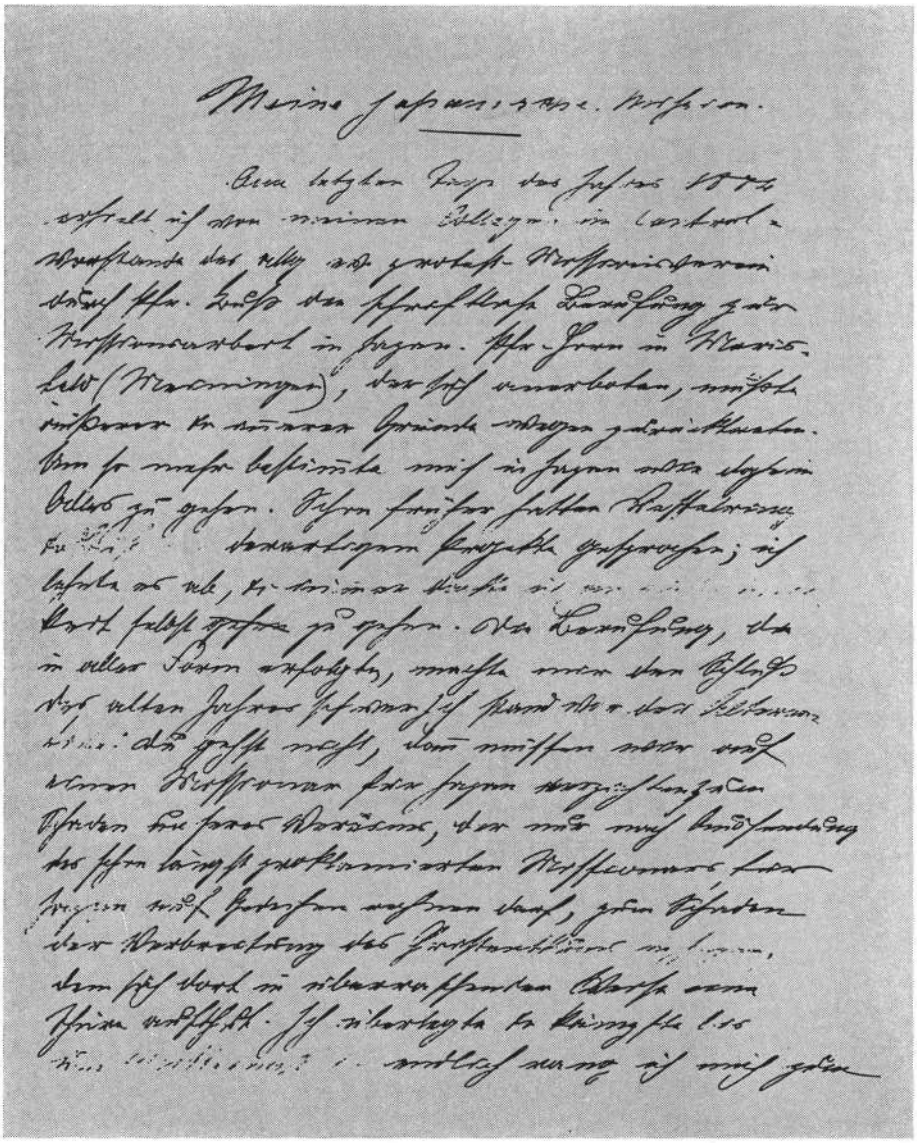
Spinner 家の人々と夕食を共にしながら，貴重な話を聞くことができたのは幸福であった。しかし，Regula 女史の話しにもたびたび出てきたが，Wilfried Spinner が19世紀末来日したとき，資格としては宣教師であり，日本と Spinner 家のつながりもキリスト教（福音新教伝道会）関係のみであるということである。獨逸学協会学校のドイツ語教師として氏が活躍したことは折に触れて言及されているが，その子孫の内では全く記憶されていない。今回，氏が獨逸学協会学校でその創立時重要な地位を占めていたことを紹介すると，Regula 女史，2人の曽孫は一層，新しい認識を持ち，祖父，曽祖父が100年前日本で伝道だけでなく，ドイツ語・ドイツ文化を専門に教えている学校の初代ドイツ人教師の一人であったことに大いに誇りをもったようである。

ヨーロッパの夏の夜は長い。8時になってもまだ明るく，外で歓談できる楽しい季節である。夕食後，薄暮の庭で100年前の大先生の曽孫と卓球ゲームに興じながら，100年の歳月の重みと，その子孫に親しく会えた喜びを心に深くきざんでいた。十分，資料を見せてもらい，また，貴重な話しを聞いたあと Spinner 家を辞したのは，長い夕暮がくれかけようとしている9時半であった。あたりはまだうっすらと明るく，昔，Spinner の先祖が手作りの品を持って渡ったであろう Zürichsee の湖面に月の光が影を落していた。

4. おわりに

1985年夏のドイツ・ベルリンにおける講習会ではその中で習得したことはもちろん，参加各国のドイツ語教員と親しく話す機会を持つことができ，また各自の学校での体験を出し合って話し合ったことは貴重な財産となった。また，この講習が単に語学講

付表 5



Spinner の日記（日本旅行について記している）

付表4

獨逸語學說演說

當冬季ヨリ一ツ橋外帝國大學講義室ニ於テ二週間毎ニ午後正五時三十分ヨリ獨逸語ヲ以テ普通學術ニ關スル演說有之候ニ付爰ニ委員等謹テ諸君ノ賞臨ヲ請フ

規定シタル演說左ノ如シ

一月三十日　月曜日　ドクトル、ミハエリス君　刑罰統計及道德
二月十三日　月曜日　ベー、エーマン君　コルクノ出處及其製造法
二月廿七日　月曜日　ドクトル、ラートゲン君　近代交通ノ發達
三月十二日　月曜日　ドクトル、ワイベルト君　共同生計組合論
三月廿六日　月曜日　ドクトル、ヘーリング君　智育及道德
四月九日　月曜日　ドクトル、ベルツ君　長壽論
四月廿三日　月曜日　ブァルレル、シユミーデル君　アッシリッシユ、バビロン文化上ノ新發見（去ル一月八日ブァルレル、スピン子ル君ノ演セラレタル羅馬府古物探究記ハ日本語ニ翻譯ノ上或ル雜誌ニ出スベシ）

聽講區域ヲシテ大ナラシメンカ爲演說后五分間ヲ經テ再ヒ同題ヲ口譯セシム

傍聽ハ無料ナレ𪜈入場口ニ(集金箱)ヲ置キ有志諸君ノ寄附ヲ乞ヒ以テ演場ノ費用ヲ辨シ其殘額ヲ以テ日本慈善ノ目的ニ充テント欲ス」

殊更ニ御婦人方ノ賞臨セラレンコトヲ希望ス

千八百八十八年一月廿三日東京ニ於テ

委員　ベルツ
ドゥルンベルヒ
ミハエリス
スピン子ル

上記ノ廣告ハ先ニ出シタル入場券ヲ補足シ又正誤スルモノトス

御用ノ方ハ麹町區上二番町十五番地ドクトル、ミハエリスニ御問合ヲ乞フ

御說每ニ殊更ニ郵便端書ヲ以テ招聘スルコトアルベシ其端書ハ直チニ入場券ニ代用スルコトヲ得

前頁案内の裏面，和文

付表 3

DEUTSCHE VORTRÄGE.

Im kommenden Winter soll eine Reihe von Vorträgen in deutscher Sprache allgemeinwissenschaftlichen Inhalts gehalten werden, zu denen Sie das unterzeichnete Comité hierdurch ergebenst einladet. Die Vorträge finden alle 14 Tage, je 5½ Uhr Nachm. *praecise* in der Vortragshalle der TEIKOKU DAI GAKU KOGIHITSU in HITOTSU-BASHI statt.

Es sind folgende Vorträge angemeldet:

Montag den	30. Januar.	Dr. Michaelis	über	„Strafstatistik and Moral."
„ „	13. Februar.	P. Ehmann	„	„die Herkunft des Korks und seine Gewinnung."
„ „	27. „	Dr. Rathgen	„	„die modernen Verkehrsmittel."
„ „	12. März.	Dr. Weipert	„	„Erwerbs-und Wirthschafts-Genossenschaften."
„ „	26. „	Dr. Hering	„	„Verstandes-Bildung und Moral."
„ „	9. April.	Dr. Baelz	„	„Langes Leben.
„ „	23. „	Pfr. Schmiedel	„	„Die Neu-Entdeckung der assyrisch-babylonischen Kultur."

(Der von Pfr. Spinner am 8. Januar gehaltene Vortrag über „Römische Wanderungen" wird demnächst in japanischer Sprache in einer Zeitschrift veröffentlicht werden.)

Um die Vorträge einem weiteren Kreise zugänglich zu machen, werden dieselben am Schluss, nach einer Pause von 5 Minuten, in japanischer Sprache wiederholt werden.

Der Eintritt zu den Vorträgen ist frei, doch wird am Schlusse am Ausgang ein Sammel-Kasten aufgestellt werden, dessen Ertrag, nach Abzug der Kosten, für einen japanischen Wohlthätigkeits-Zweck verwandt werden soll.

Ausdrücklich wird um die Betheiligung der Damen gebeten.

TOKIO DEN 23. JANUAR 1888.

DAS COMITÉ:

DR. BAELZ. FRHR. VON DOERNBERG. DR. MICHAELIS. PFR. SPINNER.

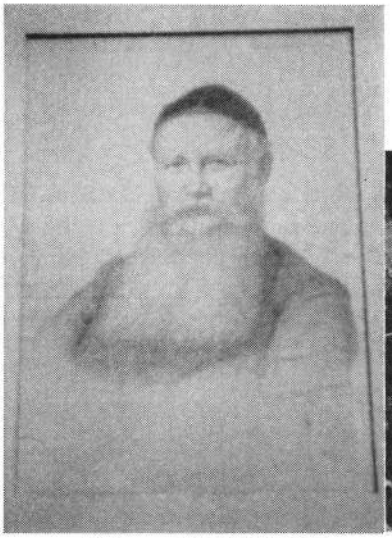
NOTIZ:

Die vorstehende Mittheilung dient den früher ausgegebenen Karten zur Ergänzung bezw. Berichtigung.

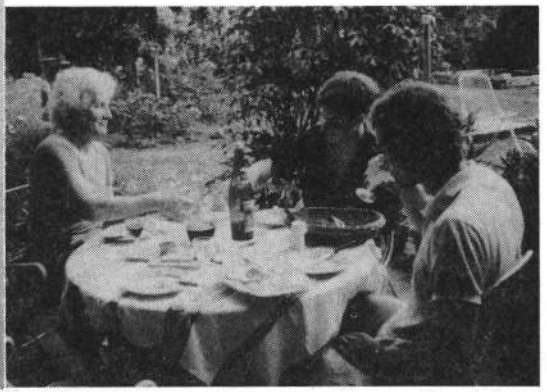
Zu den einzelnen Vorträgen wird durch besondere Postkarte eingeladen werden, die zugleich als Eintrittskarte gilt.

Anfragen sind zu richten an Dr. G. Michaelis, Kojimachiku Kaminibancho 15.

シュピンネル家所蔵のドイツ語講演説会案内（東京1888年1月23日）独文



Spinner 家にある肖像画



孫 Regula 女史（左）と2人の曾孫との夕食

所蔵されていた。その中にはドイツ語演説会のチラシ（付表-3，付表-4）やSpinner先生に提出した獨協生の独作文添削答案の多数も保存されていた。またSpinnerの肖像画や彼の貴重な著書や日記も見ることができた。

この演説会のチラシを見ると講師には当時のドイツ人の壮々たるメンバーが名を連ねている。

○ミハエリス (Georg Michaelis)……法学ベルリン地方裁判所検事局候補官
後にドイツ帝国宰相・ポメルン州首相，
獨協学校専修科教授・教頭（1885～89）

○ヘリング (Otto Herring)……獨協学校専修科教授

○ラートゲン (Karl Rathgen)……東大教授，マールブルク大教授，獨協学校専修科教授

○エーマン (Dr. Ehmann)……宣教師・学習院教授

○ベルツ (Dr. Baelz)……医師・東大教授

○シュミーデル (Pfr. Schmiedel)……宣教師後ゲテルギムナジウム教授

○ワイペルト (Dr. Weipert)……領事・法学者

○ドルンベルヒ (von Dr. Doernberg)……獨逸学協会員・ドイツ領事館公使

興味深いのは，ここにベルツが名を連ねていることである。シュピンネル，ミハエリスら獨協学校関係者とベルツが密接なつながりを持ち，演説会を主催している。獨逸学協会及び獨協学校が，ドイツ語教育においてただ学生にに対してだけでなく広く

ner)家を訪問する企画をたてた。前述講習終了後，どのような方法でSpinner家を捜し出すか，大きな課題で，日本出発後講習中もいつもこのことが頭を離れなかった。

出発前，本校で同僚と今回の訪欧計画について話しているうち，体育科萩野氏より，元本校体育科教諭で，現在スイスを中心にヨーロッパ全域にわたって，合気道の師範として活躍している池田昌富氏が，Zürich に居住していることを知らされた。池田氏は本校昭和34年卒で，体育大学卒業後柔道を主に体育教員として一時，本校に勤務されたのち，渡欧された。日本文化にも造詣の深い先生である。

ベルリンの講習中，氏と連絡をとったところ，講習終了直後 Zürich を訪れることが約束された。1985年7月23日に Berlin を出発して Hamburg の友人宅に一泊したのち，7月24日，Hannover 経由で空路 Zürich に到着した。ドイツとスイス，国は異るがドイツ語を使い日常生活には全く違いのない両国である。Zürich 国際空港に氏の出迎えを受け，久しぶりに氏宅で和食に舌つづみをうった。ビールもドイツビールとは一味違う日本のビールを賞味しなつかしい味であった。

Spinner 家は Zollikon 在住とは判明しているが，Zollikon のどこの場所か定かでない。どのようにして Spinner 家の住所を探し当てるか，Zürich の事情を聞きながら相談したところ，日本の（N.T.T.）104に相当する電話番号案内が一番親切であるという。翌日，早速その方法でSpinner家の住所を尋ねた。局は親切に住所を教えてくれた。池田氏の案内で Zürich の中心部から市電で町外れまで行き(注2)，更に国電か郊外のバスで一駅先の Zollikon に行った。教えられた住所を地図で確認しながら Spinner 家を捜した。

獨逸学協会学校で教鞭をとった Wilfried Spinner，その子息 Gerhard Spinner，そして現在，その子女達 Wilfrid と Regula の兄妹とその家族が Zollikon に住んでいる。連絡をとったところ，Regula Spinner 女史と話ができ，Spinner 家を訪問できる見通しがついた。Spinner 家は Zürich 郊外の Zollikon の住宅地にあり旧来の立派な家である。

7月25日，Regula 女史と2人の甥(Wilfrid 氏の子息)に迎えられて Spinner 家の門をくぐった。番地の少し違うところにRegula女史の家と Wilfrid 家がある。Wilfrid 氏は Urlanb（休暇）で長期不在のため会えなかったのは残念である。来訪の趣旨を説明し，その中で獨協学園（獨逸学協会学校の後身）と Wilfried Spinner 氏（先代）の関係を強調したところ非常に歓待され，奥の書斎に案内された。書斎にはまだ整理されていないとは言え，当時の獨逸学協会学校関係の貴重な資料が，箱の中に無数に

（注2） Tiefenbrunnen.

3. Spinner（シュピンネル）家訪問—Zürich—

1881（明治14年）独逸学協会が創立された。その経緯については「獨協五十年史」に詳しく記述されている。青木周蔵，平田東助，山脇玄，荒川邦蔵，橋本綱常，萩原三桂の諸氏が明治の初めにドイツへ留学している。青木はその中で次のように提言している。——即ち，我等は人を癒す医者になるのも必要であるが，国家を診る医者になるのもまた必要である。それには堅実なる独逸の政治法律の学問を学ぶ必要があると。これによって方向転換をしたのが青木周蔵，山脇　玄，平田東助，荒川邦蔵の諸氏であっのである。これが法政方面の独逸学輸入の端緒となったのであり，又，実に独逸学協会の創立ともなるのである。——協会の主たる事業は3つあった。第1に翻訳，第2に月刊誌の発行，第3学校の開設である。（獨協50年史，第8ページ司馬享太郎文）。その後，1883年（明治16年）10月22日開校された。（同12ページ～13ページ），初代校長は西周氏。幹事山脇玄氏。教務手塚定二郎氏。庶務益森氏。一般教員，独逸語手塚定二郎氏，生田美則，木村松太郎，谷口秀太郎の各氏と余（筆者〈注〉司馬享太郎），数学井口榮治氏後に一名，波木井九十郎を加へ漢学に明石孫太郎氏後三人，独逸教師はシュピンネル（宣教師），ヘーリング（独逸から最初に呼んだ）。（同16ページ）。

上記のように，1883年に獨逸協会学校が創立されたときからシュピンネルが名を連ねている。——シュピンネルは英国に3か月滞在し，ニューヨークとサンフランシスコを経由して日本に着いたのは，1885（明治18年）9月8日であった。ヘーリングはすでに約半年前に東京の獨逸学協会学校に着任し，牛込佐内坂上に住んでいたが，シュピンネルは初めてこのヘーリング宅に身を寄せ，数日後日築地明石町の外国人居留地に一家を構え，10月の初めには神田駿河台鈴木町12番地へ移っている。（独逸普及福音新教伝道会の成立からその日本伝道開始までの事情について——堀　光男〈東洋大学紀要教養課程編第17号，昭.53—3〉。

本学園百年史のなかでシュピンネルの存在は大きく，その研究を独自に進めなければならない。本学園史「目でみる独協百年」にも見られるようにシュピンネルは獨逸協会学校発足時ユニークなドイツ語教師であった。本学園百年史委員としてで研究を進めるうち，シュピンネルの子孫がスイス・チューリヒ郊外ツォリコン（Zollikon）に在住していることが判明した(注1)。本史編纂室小池委員長，斎藤主任の依頼によりこの機会にチューリヒ（Zürich）郊外ツォリコン（Zollikon）のシュピンネル（Spin-

（注1）　東洋大学紀要，堀光男著〈独逸普及福音新教伝道会の成立からその日本伝道開始までの事情について〉……13ページ〈注—13〉

"Japanisch als Fremdsprache am Gymnasium Weierhof"

—Entwicklungsstand des Projektes im Schuljahr 1985/86— (Stand November 1985)

Kursstufe	Kursart	Zahl der Schüler	Stundenzahl pro Woche	Lerninhalt (Schwerpunkt)
8	NG (Neigungsgruppe)	24	1	(Einführungsphase) 46 Silben Hiragana, einfache Ausdrücke sowie Begrüßungsformeln, Grundwissen über Japan
9	3. Fremdsprache	20 (2クラス)	3	Lehrbuch: Lektion 3 (einfacher Aussagesatz, Partikel "no" als Funktion des Genitives, Possesivpronomen) 46 Silben Hiragana, 3 Kanji (chinesisches Schriftzeichen)
10	3. Fremdsprache	14 (2クラス)	3	Lehrbuch: Lektion 8 (Transitivverben, Partikeln "o" für Funktion des Akkusativs und "de" als Ortsangabe, temporale Adverbien) 46 Silben Hiragana, 28 Kanji
11	2. od. 3. Fremdsprache	5	4	Lehrbuch: Lektion 15 ("te"-Form der Verben, Ausdruck von Aufforderung, Erlaubnis und Verbot) 46 Silben Katakana, ca. 80 Kanji
12	2. od. 3. Fremdsprache	10	4	Lehrbuch: Lektion 21 (Gebrauch der einfachen Form der Verben Ausdruck des Müssens, verneinter Imperativ) ca. 150 Kanji
13	2. od. 3. Fremdsprache	8	4	Lehrbuch: Lektion 24 (Konjunktiv höflicher Stil und einfacher Stil bei der Konversation) Nebenlektüre: "Nihon no chiri" (über Geographie, Industrie, usw.) ca. 180 Kanji

20課終了後，副教材（読み物）として並行使用。

④視聴覚教材：ビ デ オ——国立国語研究所「日本語教育映画」

交国際流基金「ヤンさんと日本の人々」

スライド——国際交流基金　スライドバンク

自作スライド

視聴覚教材は，文型練習の補助や聞き取り練習などに使用する他，日本事情の紹介にも活用している。

(3) 学習状況

学年	文法・表現		文字		
	教材	学習課・内容のポイント	教材	学習内容	学習漢字数
8	自作プリント	(準備段階としてあいさつなどの簡単な表現を学習)	かな入門	ひらがな	——
9	自作教科書	L. 6 動詞:行/来/帰，助詞:「へ」，「に」 ——は{—— 時 ㊷ / ——曜日㊷}——㊸行きます。	〃	〃	15
10	〃	L. 13 形容詞の使い方；高い山，有名な山 願望の表現:——たいです。	〃	かたかな	58
11	〃	L. 16 te-Form の使い方Ⅱ 進行・状態:——ています。	新出漢字の学習が中心となる。教科書の内容と結びつけた練習問題，書き取り，作文などで読み書きの力をのばす。		95
12	〃 (日本事情シリーズ 日本の地理)	L. 21 nai-Form の使い方 ——ないで下さい。 ——なければなりません。 ——なくてもいいです。			152

修科目に採り入れていることに注目したい。当校では持田節子氏が専任教員として大活躍されており，西独における日本語中等教育のメッカとなっている。当校の校長 Georg Ballod 氏は1984年10月本校を来訪されて授業を参観されたのち，生徒や教員と懇談された。また，本校からも1985年常任理事やドイツ語科教員が当ギムナジウムを訪問すると共に，教科書など書物の交換や生徒間の文通も進めて交流を深めている。参考までに持田節子氏の作成された1984/1985の Weierhof 校における日本語教育計画を示す。

Gymnasium Weierhof の日本語教育

持　田　節　子

——1985年3月現在の現状及び問題点について——

(Schuljahr 1984/85)

(1) 現　状

学年	コースの形態	生徒数	①週時間数
8	Neigungsgruppe(課外活動)	17	1
9	第 3 外国語	②14	3
10	第 3 外国語	11	3
11	第 2 外国語 ③第 3 外国語	6 4 } 10	4
12	第 2 外国語 第 3 外国語	4 4 } 8	4

(注) ① 1授業時間は，45分間である。

② 近郊の州立 Gymnasium から日本語クラスに特別参加している9年生の生徒3名を含む。

③ 11年生，12年生の第3外国語としての日本語は選択必修の場合と自由選択の場合とがある。

(2) 教材及び学習内容について

• 教材——①自作教科書：Gymnasium の生徒に適した教科書を開発中。

30課で初級終了程度（語彙約 800，漢字約 250，初級文法，表現）を目標とする。

教科書に合わせた練習帳，文法説明，ハンドブックなども準備中。

②「かな入門」(国際交流基金)：一部をドイツ語訳に変えて使用。

③日本事情シリーズ「東京」，「日本の地理」（日本語教育学会)：教科書

気づく。このような貴重な経験を以後の授業に一つでも多く採り入れたい(3)。

＜注1＞

この他，ことばに親しむ方法として次のような授業案も披露された。

○Kennenlernspiel… 人について書かせる。(形容詞などの練習)
〔最初紙面で自己紹介したゲーム〕

○Assoziogramm… Berlin を中心に知っていることを紙に書く（絵，歌，マンガなど）
〔教室ではドイツを中心に，また現在の事項を中心に拡大できる〕

○Lied Lückentext… グループに分けてそれぞれ異った節文を考えさせる。行や順を変えて考えさせる。
〔一部の単語を隠して，穴埋めなどの練習にも用いる〕

○Montagespiel… 最初にことばを与えて，次に Film を見せる。
(逆も可能)

○Zuordnungspuzzle… 一枚の紙文字を記入して適当に切り，組み合わせる。また，熟語，諺などを用いる

○Bürgerbefragung…市 民へのインタビューで都市の様子を知る

＜注2＞

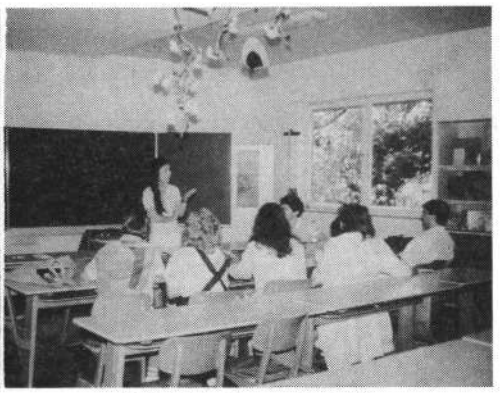
西側では西ベルリンを { West-Berlin / West Berlin / Berlin-West / Berlin (West) } と表している。これに対して

東側は一貫して Westberlin と表記している。

＜注3＞

近年，西独では日本語熱が高まっている。その中で，ラインラント・ファルツ (Rheinland-Pfalz) 州，ワイエアホーフ (Weierhof) にあるギムナジウムで，1980年より日本語を正課授業に採り入れている。その他の都市でも数多く日本語の授業をしている学校が見られるが，クラブ活動や自由選択科目として授業している。しかし Gymnasium Weierhof では，西ドイツではじめてこの形態 (Neiguns-gruppe〈課外活動〉) の他，第2外国語や第3外国語として必

Weierhof 校の Ballod 校長と持田さん（後は校舎とグランド）



Weierhof 校の日本語授業

も日常的なものが多くなっている。新しい教科書の他特に，スライドやビデオの紹介が多かった。ビデオである場面を生徒に見せて，すぐにその場面を数人の生徒に演じさせて言いまわしを習得する方法も目新しいものの１つであった。講師が我々参加者の一人一人に，「この教材，この方法が学校の生徒に適しているかどうか」質問していたが，参加者同志も体験を討論したのも参考になった。

10) 時事テーマ調査

講習も終りに近づいて最後の調査になった。テーマは時事問題で，住宅事情，余暇，青少年の生活，新聞社見学などが用意されている。それぞれ担当の役所や会社を訪問してインタビューして，その結果をグループ討論で発表するものである。

11) ゼミナールのまとめ――終りの集い

３週間のゼミナールのまとめとして終りの２日間，２つのグループでまとめの記念集を作成した。１つは２週間の経過を新聞形式にして編集した。イタリアの活発な男性が編集長となり参加者一人一人に役柄をつけていた。私はどういうわけか超まじめに見られたらしい。物語の中で警官役になってしまった。もう一方のグループはスライドでやはり３週間の物語りを作成した。私が講習中，その様子をカメラに納めていたが，そのフィルムとあと仲間数人のものを合わせ使用した。両方共，講習の経過とはそれ程密な関係もなく，楽しいストーリーに仕上げられたのは，編集グループの中のイタリアの人達が積極的に意見を言ったからであろう。国民性の違いというか，底抜けに明るい彼らには見習う点も多い。

以上，講習の概要であるが，この他３週間宿泊の世話をしてくれた各家庭の人々(Gastgeber) の歓迎の夕べを開いた。そのとき各国のお国自慢を披露することになったが，我々日本人グループ２人は参会者全員に“漢字クイズ”をしてみた。漢字を示してその意味を３つドイツ語で出し当てるクイズである。おもしろかったのは“山”を，①Berg (山)，②Bahnhof (駅)，③Fluß (河)，の意味で示したところ答えは②が一番多かった。ヨーロッパには行止り式の駅が多く「山」がその駅の形態に似ているということから出た結果である。

３週間の講習も終ってしまうとアッという間であった。講習では，語学の授業はただ単に「ことば」に関することだけでなく，ことばを基本にそこから拡がる思想や文化，人々の生活習慣や制度を十分理解したうえ，ことばの教授に活かさなければならないことを痛感させられた。我々は語学ということばのみにとらわれがちであるが，語学程裾野の広いものはない。書物で外国語の単語一つを理解したとしても，実際，現地を見て，人々の生活や文化に触れるとその語が全く別の意味を表していることに

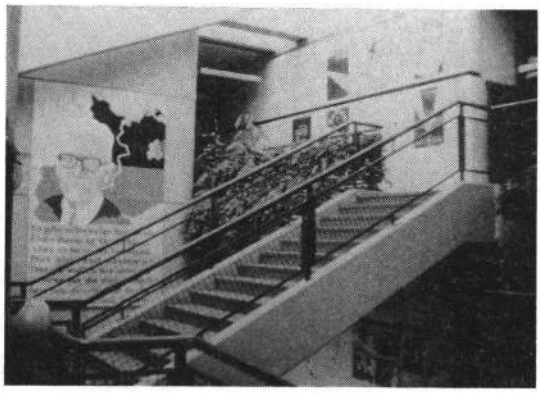
である。学校には地域の図書館も併設されていて，書物の他，ビデオやディスクの装置も完備しており，共に気軽に市民が利用できるようになっている。校長や教頭，語学主任の説明を受けたのち，目当の日本語の授業を参観した。日本では高校生に相当する生徒が簡単な日本語の言い回しや日本文化を学んでいた。ひらがな，カタカナや簡単な漢字の書き方や意味も早いペースで学んでいた。日本語を勉強する際，教員にも生徒にも多くの悩みがあるが，特に教材には，内容的には生徒の年齢にふさわしいもので，使用語や表現の比較的やさしいものがないというのが困ることだ，という。また，日本人や日本文化に接する機会も少なく書物からだけでは生徒もなかなか理解できないということである。これはちょうど我々が日本でドイツ語を学ぶときと同じ悩みである。

ゲザムト・シューレなので，生徒のすべてが大学を目指しているわけではなく，半数近くは，日本で言う中学卒業や高校卒業の段階で就職している。進学者と途中で就職する者との調和にも苦労していると言う。日本語学習を奨励するにはぜひ日本を訪問させたいというのが同校関係者の大きな希望で，本校との連絡も密にしたいと話していた。本校から生徒の作文集や教科書を送ったところ大いに参考になるという返事が届けられた。

Goethe の教室で例によってグループ報告を行ったが，ベルリンで日本語の授業を見学したというので参加者の興味を引いた。また，日本の学校制度の違いも説明を求められたが，殆んど予備知識がなく，依然として欧米人には日本は遠い存在なのである(注3)。

9) 新しい教材を使っての研究

先述の如く，語学教育の目的がすぐに使える語学ということで，教科書のテーマ



Gustav Heinemann-Schule のコンコース

が，依然として西側とは20年程度の差が存在する。特に目立つのは食料品不足である。昼食のとき，レストランへ向うと長蛇の列で1時間程待たなければならない。メニューには西と同じ程の品目が並んでいるのでウェイトレスに好みの品を注文すると“ない”という返事の連続である。結局，何があるのか尋ねると2～3品しかない。また果実は特に深刻で，なかなか手に入らないことも多いそうだ。町でのまとめは後程記すことにして，帰途の検問所通過は一層厳重であった。我々日本人には比較的寛大であるが西ベルリン市民には，トランク，バックのすべてを開けて確認し，クッションのようなものはレントゲン検査にかけて調べていた。パスポート検査が3回あり，時間は40分以上を要した。夕刻，往きと同じルートで西に戻ったが，ホッとする気持を感じると共に，空気まで東とは違うように思うのはなぜだろうか。

翌日，東ベルリン訪問のまとめをした。例によってグループ作業で各自のレポートを報告する。前述の街路・建物の復興や食料品の不足についてはほぼ全員が記述していた。その他目立つのは東ベルリンの方が西ベルリンより清潔であること（ゴミが落ちていない），軍人や警官など制服組が町中で非常に目立つことが指摘された。東で歴史展を見学した者から，西側と異り歴史も東側の解釈でのみ示されていることも出ていた。しかし，旧ベルリンからの文化施設が東側にたくさんあるためか，オペラ演奏など評価は高かった。(注2)

7) 学校訪問・調査

8) 専門家による学校制度についての説明

見学・訪問の中では学校訪問が一番興味深かった。見学の前に制度の説明があった。ドイツでは小学校（Grundschule）の4年生のあと，ギムナジウム（Gymnasium）・レアールシューレ（Realschule）・ハウプトシューレ（Hauptschule）の3つのコースのいずれかに進学することになる。しかし，10歳で将来の進路を決定することに関する疑問や，上級学校への進学希望者数の増加により，この学校制度も検討が加えられた。その結果，ゲザムトシューレ（Gesamtschule）がつくられた。3つのコースが1つの学校に集約されたものである。このゲザムトシューレの運営にはその後いろいろ困難なことがあるようで，それほど大きな発展は見ていない。西ベルリンでは西独内よりゲザムトシューレが多く存在している。

その中の1つ Gustav Heinemann Schule を訪問した。当校では獨協大学卒の朝倉スマコ氏が日本語の講師を務めている。ベルリンには3校で日本語を選択科目として置いている。G-H Schule は西ベルリン南部の“壁”の近くにある新しい学校

り，裏通りの影にひっそりと隠れている遺跡を探し出し，また，警察署など役所で質問することなど，ハードなスケジュールである。午後，見学した区域の特徴や各自の感想を発表したあと，グループがまとめる。歩いて見学したことにより地元と密着した街の様子がよく理解できた。

6) 専門家による東ベルリンの説明とその後の調査・訪問

ベルリン全体についての説明は前週行われたが，今回は特に東ベルリンについてである。ドイツは1945年敗戦時，米英仏ソの４大国によって占領された。首都ベルリンも同時に４大国に占領された。1949年，米英仏占領地域が西独に，ソ連占領地域が東独となり，その後主権を回復した。首都ベルリンの米英仏占領地域は西ベルリンに，ソ連占領地域は東ベルリンとなった。1961年の隔構築以前は東西間の往来は自由であったが，市民の西への流出，特に若年労働者層の流出に危機感を抱いた東側が壁を構築して通行を遮断してしまった。現在，我々外国人は国電・地下鉄 (S-Bahn, U-Bahn) でフリードリヒ・シュトラーセ駅 (Friedrichstraße) で降りて，検問所を通るか，チェックポイント・チャーリー (Checkpoint Charlie) を越すか，いずれかで東に入れる。フリードリヒ・シュトラーセの S-Bahn や U-Bahn ホームは西側と同じ扱いである。ホームから地下通路を通って東の検問所に並ぶ。この列が時には１時間かかることもある。パスポートを示し，通行費DM5.（５西独マルク）を支払い，そのうえ，DM25. を強制的に交換させられる。これで，24時までの滞在の許可が得られる。現在の東ベルリンは東独の首都である。旧ベルリンの中心街は殆んど現在の東ベルリンに位置している。壁一つで東西が隔てられているが，街路の様子は一変する。街路の復興は数年前から比較すると急速に進んだ

東西を分ける“壁”―西より東を見る―

東ベルリンから見たブランデンブルク門
(Brandenburger Tor)

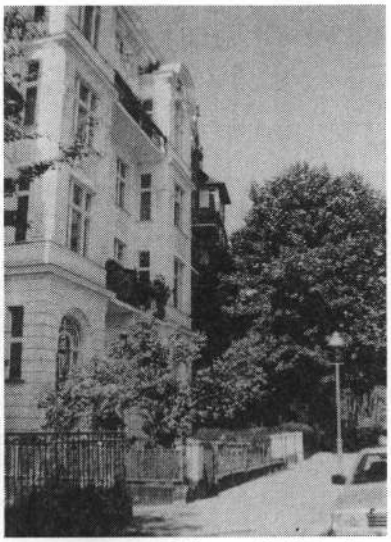
の生活を当然のこととして受け入れている。1945年の激戦，1961年の壁建設，1972年のベルリンの地位確認によるこの町の変化が，人々の生活の中にはっきり浮き出ていた。

4) 授業教育法

我々参加者にとって最も興味のある問題の一つである。日本を除いて参加者は欧米の人達ばかりで，それぞれの授業方法も全く異っている。欧米ではドイツ語を使う機会も多く，ドイツを訪れるチャンスも少くない。ヨーロッパ諸国は，それぞれ受講している外国語により，その国（ドイツ語受講者ならドイツ，フランス語ならフランス）を修学旅行で訪れることも多いそうである。従って，書物から学ぶのではなく“ことば”を聞き，話すことにより学ぶのが主流である。日本の学校での授業形式は彼ら欧米人にとっては余り理解されない。日本での学校制度の紹介とドイツ語の授業内容，教材，大学入試との関連を説明した。彼らの第一の疑問は，なぜ，ドイツ語を書物からのみ学習するのか，それも和訳，文法の学習に片寄りすぎていないか。次に，なぜ大学入試のドイツ語の内容がそんなに難かしいのか，という点であった。我が国に外国語が入ってきた過程や我が国が極東に位置していることをつけ加えても，水と油のような議論である。しかし，日本語が欧米言語とは全く異った形態であることは明白であり，我々が外国語を学ぶより，彼らが日本語を学ぶ方がはるかに困難であることは全員の認めるところであった。(注1)

5) 市内探索・研究

指定された2人がペアを組んで，与えられたテクストに従って，市内探索するものである。我々はベルリンの下町モアビト（Moabit）周辺を回った。山野を回るオリエンテーリングの市内版とも言う学習法である。出発点（旧国電駅ベルヴュー〈S-Bahn, Bellevue〉駅前）で落ち合った。まず最初は古い立派な家が並ぶ住宅街の探索である。昔は一軒の家であったものが現在は，数家族が入り，一部は事務室として使用されていた。それを見学したあと，テクストの問いの部分に答えを記入して次へ進む。通行人に質問して答えを見い出した



西ベルリン Bellevue 駅近くの旧住宅街

れた人々に対する慰霊碑のところでは，様相が一変した。その慰霊碑，展示場とも簡素なものであるが，そこから伝わってくる過去の教えや，歴史の重みは言葉に表せない。一行，厳粛な気持になりバスに戻り，何もなかったかのように，にぎやかなクーダムで解散となった。この都市紹介で最も印象的だったのは，ナチスドイツの犠牲となった人々の慰霊の場である。過去の戦争犯罪を覆い隠さず，堂々と人々の目の前に出して，自らその罪に対する反省の心を表している現在のドイツ民族には見習うところが多々あると教えられる思いである。

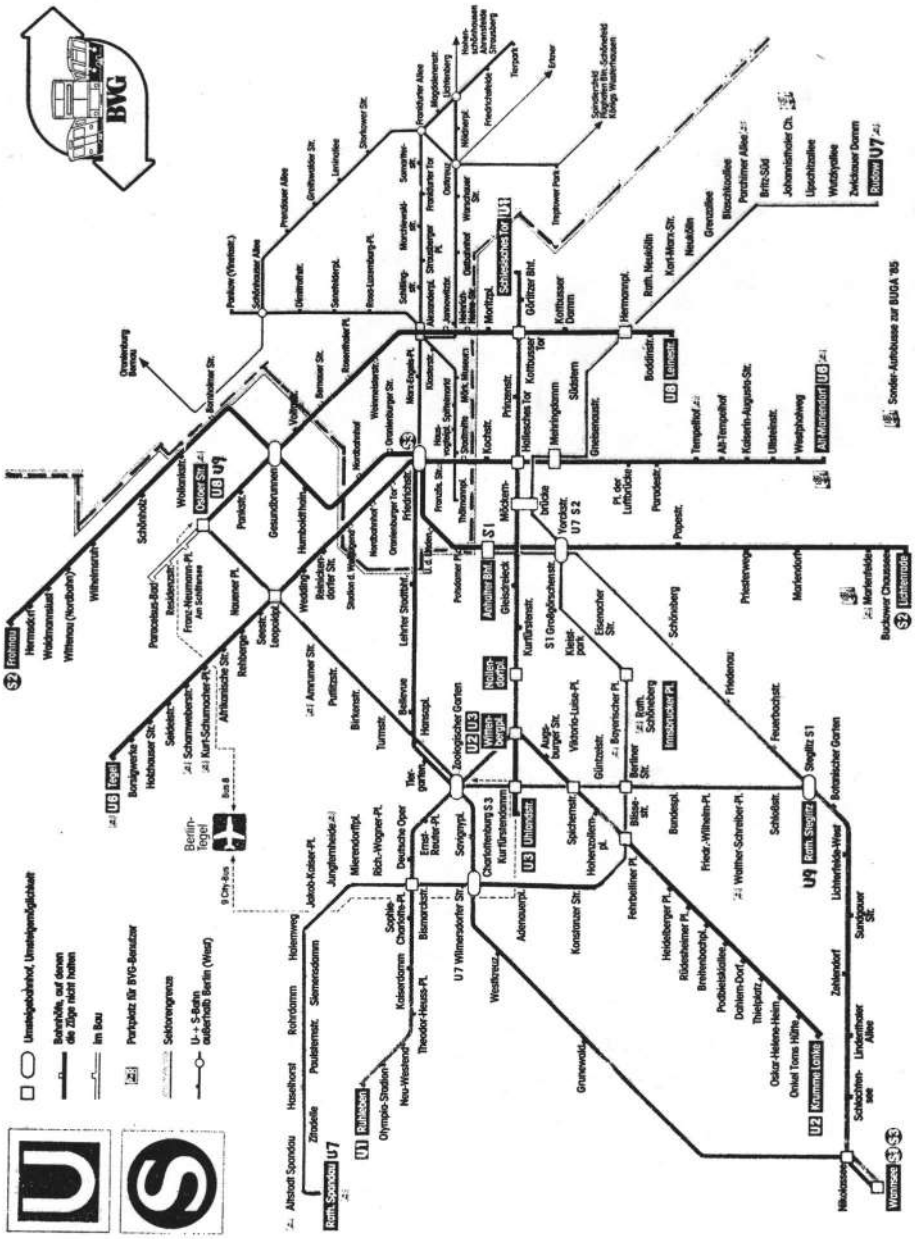
3) ベルリンの生活についての調査

講習の中で難しい課題の一つであった。講習中の宿を世話してくれる家庭の人々に，ベルリンについての考えや，当地における生活，東西分割状態の影響などをインタビューするのである。各下宿の方々の年齢によって，ベルリンでの生活についても，相当異った考えが示される。私の場合，東独出身の家族で，東西ドイツの生活の違いが鮮明に示された。西ベルリンでは“島国”状態の生活であり，日常の生活には不自由はないが，休みに市外に出られないのが苦しいこと，西ベルリン市民ということで，西独国民とは区別され，東ベルリンに入るのも，数週間前に届出なければならないこと，パスポートも西独国民と表記が異ることなど，東西接点の厳しい一面を聞かされた。東ドイツへは肉親訪問など届出れば比較的簡単に許可されるが，幼小の頃親しく育った兄妹でも，兄が東独の公務員であれば，すでに西へ出ている妹とはすれ違っても口をきいてはならないということである。

さまざまな意見を翌日，教室に持ち寄り任意のグループに別れて討論した。その結果を表にまとめて発表した。老年（70代）の世代は過去の華やかなベルリンをなつかしみ，壮年（50～60代）は戦中，戦後の苦しみを訴え，30代は東西分割状態で

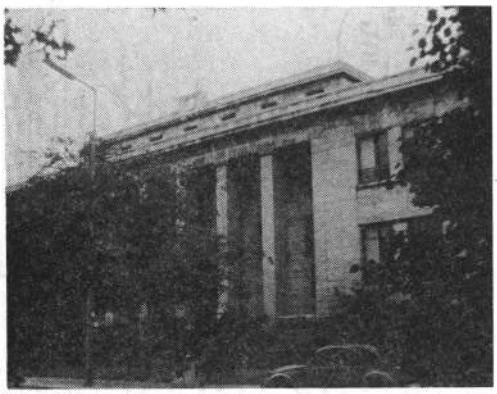
ゼミナールの風景，一日のまとめと明日の相談

付表 2



BVG (Berliner Verkehrs-Betriebe) 1985
(ベルリン交通局<西>発行，1985年版交通案内図)
筆者注…点線は東西分断の「壁」

西ベルリン中心街



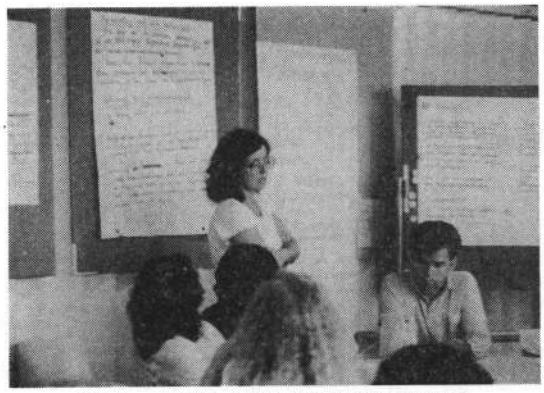
現在は西ベルリンにある旧日本帝国大使館

れたかの解説があった。日本の首都東京の成立とは大いに趣を異にするが，大都市が形成された過程はいささか共通するものがある。興味深かったのは，我々外国人が一番注目している戦後の分割されたベルリンの解説は非常に少なくて，それよりも，大都市ベルリンがどのように形成されたか，という点に主眼が置かれていたことである。多少の討論のあとこの成果を翌日の市内見学に生かすことになった。

翌日は10時より市内見学が行われたが，その中では，現在の問題として外国人労働者，特にトルコ人の問題を取り挙げ，トルコ人居住区クロイツベルク (Kreuzberg)を見学した。昔からのスタイルのままの住居に大家族で住み，晴は，子供を市内のドイツの学校へ通わせながら，下校後はトルコ独自の教育をしている，とのことである。そのクロイツベルクを経由して，東西を分断する“壁”を目のあたりに見るポッダーマープラッツ (Potsdamer-Platz) へ向った。東西を分断する政治の矢面にたつ厳しい現実を表す壁であるが，構築されてからすでに20余年，半分もう固定化されていると言っても過言ではない。東側はもちろん厳しく制限されて，壁まで 1km は近寄れない。一面，立入禁止区域になっていて地雷が埋め込まれているということである。無味乾燥なコンクリート地帯の中に，我が国の昔日の消防の火の見櫓のような，東側の監視塔が間隔狭しと立っている。一方，壁一つ隔てた西側では壁のすぐそばまで行けるのは言うまでもない。そのうえ，近年，その壁面にイラスト風の絵を描くのが流行しているらしい。一面，かなり派手な絵が見られた。

比較的平穏に進んだ市内見学であるが，Plötzensee のナチスドイツによって殺さ

リンは良かった。あのベルリンを再びとり戻したい。」と言った。中年の現役ビジネスマンは，「西独出身だが，ベルリンは仕事のできる場所だ。昔のことは知らない。単純に，仕事の場だ，と考えている。」と答えた。更に，老年の孫の手を引いた女性は，「東プロイセン(現在はポーランド領)出身だが，西に住めて幸せと思う。しかし，東西の往来が人道的に自由になることを望む。」と言った。あと数人，それぞれのジェネレーションの人々に質問したが答えは大同小異である。しかし，質問した人々，すべてから得た共通的な答えは，「ベルリンの現状は止むを得ないだろう。けれども，東西の往来の自由，東西ドイツ人同志の交通はもっと促進すべきであり，現在の状態は大いに不満である。戦争の結果とは言え，ベルリン問題がドイツ人同志のみで解決できないのは困ったことだ。東の軟化を切望する。しかし，東西を分断する“壁”に象徴される現在のベルリンは，今すぐには変化しないだろう。」というものであった。戦後40年，過去への郷愁と現在の厳しさが同居するベルリンの生の声を聞いた思いである。——現実に戻って我々2人はこのレポートをまとめて3時間後に教室に戻った。教室では今までのパートナー同志を分けて，それぞれ別の人達で3つのグループに組みかえられた。この新グループで，自分の経験を報告して，ベルリンの市民に対するレポートをまとめた。結果は前述の各市民の答えの通りであった。それをグループの代表が，全員に発表し，その後，全員で討論してこの件の結論となった。



ゼミナール風景（報告を持ち寄り討論中）

2) 専門家によるベルリンの説明・市内見学

我々外国人に対してベルリンという都市をあらゆる角度から紹介して，説明するのが，この項目である。講師はまず，歴史的に，それも単に戦後の分割の歴史だけではなく，ドイツ帝国首都としての大ベルリンが，18世紀以来，どのように形成さ

2）専門家によるベルリンの説明・市内見学

(Expertengespräch, Stadtrundfahrt „Berlin (West)“)

3）ベルリンの生活について調査

(Recherche I. „Leben in Berlin“)

4）授業教育法

(Seminarmethodik/—didaktik)

5）市内探索・研究

(Spurensicherung)

以上　第1週

6）専門家による東ベルリンの説明，その後調査・訪問

(Expertengespräch-Ostberlin,……Besuch in Ostberlin)

7）学校訪問，調査

(Recherche II.—Lehrer, Schüler, Schule)

8）専門家による学校についての説明

(Expertengespräch—Schulsystem)

以上　第2週

9）新しい教材を使っての研究

(Arbeit mit authentischen Materialien)

10）時事テーマ調査

(Recherche III—Aktuelle Themen)

11）ゼミナールのまとめ——終りの集い

(Zusammenfassung des Seminars—Berlin Ausklang 〔Evaluation〕)

以上　第3週(終了)

次に，前記の各項目に従ってこのゼミナールの全容を紹介したい。

1）ベルリン市民に対して質問することによって，ベルリンという都市を理解することに目的を置いている。講師に指示された2名がペアとなり，指定された地点で通行する市民や，その場所に居合せた人達に，まず，インタビューをする。私は当日，ポルトガルの女性とペアになり，ベルリンの中心街，TU (Techinische Universität—ベルリン工科大学）の近くの場所 (Steinplatz) を指定された。その場所に行く途中，中心街クアフュルステンダム (Kurfürsten-danm—通称クーダム〈Kudamm〉) で2・3インタビューを試みた。老婦人はその中で，「昔の華やかなベル

付表 1

Vorläufiges Programm des A 1 vom 29.6.–20.7.1985

Sonntag	Montag	Dienstag	Mittwoch	Donnerstag	Freitag	Sonnabend
ANREISE: Sonnabend	Berlin kennenlernen Konzept u.Programm	Expertengespräch	Vorbereitung Stadtrundfahrt Berlin(West)	Recherche I (Auswertung)	Spuren-	frei
frei	Fragen an Berliner Bürger "Wir über uns"	Recherche I (Vorbereitung)	Recherche I: "Leben in Berlin"	Seminarmethodik/-didaktik d.1.Woche Spurensicherung (Vorbereitung)	sicherung (Auswertung I)	frei
frei	frei	DAS ABEND-PROGRAMM WIRD KURZFRISTIG				

Sonntag	Montag	Dienstag	Mittwoch	Donnerstag	Freitag	Sonnabend
frei	Spurensicherung (Auswertung II) Zwischenevaluation Ost-Berlin (Vorbereitung)	Besuch	Besuch in Ost-Berl. (Auswertung) Expertengespräch	Recherche II:	Fortsetzung Recherche II	frei
frei	frei	in Ost - Berlin	Recherche II (Vorbereitung)	"Lehrer, Schüler Schule"	Recherche II (Auswertung) Expertengespräch	frei
frei			FESTGELEGT —			

Sonntag	Montag	Dienstag	Mittwoch	Donnerstag	Freitag	Sonnabend
frei	Arbeit mit authentischen Materialien	Recherche III:	Fortsetzung Recherche III	Zusammen-fassung	Berlin-Ausklang Evaluation	ABREISE
frei	Recherche III (Vorbereitung)	"Aktuelle Themen"	Recherche III (Auswertung)	des Seminars	frei	ABREISE

通りとは違い，一歩裏通りや，繁華街から外れたところでは，まだ戦争のキズ跡が残っている。2年後に開都750年を迎えるにあたり，各所で復旧や化粧直しが行なわれている。

第1日（7月1日）は，9時に町の中心 Knesebeckstraße の Goethe-Institut に着いた。日本から2人の参加で，あとは欧米各国からの参加であった。

（アイスランド〔1〕，フィンランド〔1〕，デンマーク〔1〕，ギリシア〔1〕，カナダ〔1〕，アメリカ〔1〕，日本〔2〕，ポルトガル〔2〕，イギリス〔3〕，ユーゴー〔4〕，フランス〔5〕，イタリア〔6〕——計28名）

思い思いに席に着いて，自己紹介しながら話しをしていると，このゼミナールの2人の講師と事務の1人が入ってきた。突然，参加者にカードが配布された。何の変哲もない一片の紙である。その紙に，各自が，

a）どんな色が好きか？

b）ドイツ語ではどんなことばが好きか？

c）男性か，女性か？

d）未婚か，既婚か？　または，子供は？

等々を記入して，講師に提出した。その後無作為にそのカードが全員に配布された。そのカードを頼りに誰のものか，すぐ当てることになった。狭い部屋を右往左往して，お目当の人にそのカードを返した。5分程のことであるが，全員が知り合いになり気分が和んだ。そのカードでおもしろい対比があった。

1）28 Jahre alt. noch ledig.（28歳，まだ未婚）

2）27 Jahre alt. ledig ohne Kinder（27歳，未婚，子供なし）

もちろん，どちらも女性である。それぞれどこの国の人か考えると楽しい。国民性の違いがよく表れていると思う。

自由に着席したところで，予定表が配布された（付表1）。その表に従って3週間の予定の説明があった。ほぼ，どんなことを我々が勉強するのか，明らかになったが，Spuren-sicherung という耳馴れないことばもあった。

この講習は一般の語学講習ではない。ベルリンという都市を識り，そこの文化，人々の生活を考え，これらを通じてドイツ，ドイツ文化を識ることにより母国へ帰ってドイツ語の授業にそれを活かすことに主目的を置いている。

3週間の内容をまとめると，ほぼ次のようになる。

1）ベルリン市民に対する質問によってベルリンを識る。

(Fragen an Berliner Bürger—„Wir über uns“)

＜資料＞

D. Spinner 教授の資料についての一考察

附 Goethe-Institut のゼミナール＜Berlin, 1985＞に
関連して

合田 憲

1. はじめに
2. Goethe-Institut のゼミナール (Berlin) について
3. Spinner 家訪問 (Zürich)
4. おわりに

1. はじめに

1985年9月下旬から8月下旬まで2か月間，Goethe-Institut の外国人ドイツ語教員のためのゼミナール受講と，本学園百年史関係調査のため，ドイツ，スイス，デンマーク等に滞在した。ここにその中から，Berlin でのゼミナールと Zürich での Spinner 家訪問について報告することにしたい。

2. Goethe-Institutのゼミナール (Berlin) について

4月下旬，東京の Goethe-Institut から，夏期，Berlin で行なわれる外国人ドイツ語教員のためのゼミナール参加の打診があった。Goethe-Institut によって毎年1回行われている「高等学校におけるドイツ語教員のゼミナール」参加者から毎年1名がドイツ連邦共和国（以下西独と記す）における Goethe-Institut のゼミナールに派遣されているものの一環である。早速，学校当局をはじめ，関係諸氏のご理解もあり，参加のための準備にかかった。

講習の日程は7月1日（月）～7月19日（金）までの3週間であるが，6月29日には Berlin（西）に着くように指示があった。Berlin での講習中はホーム・ステイで，今回は日本にもたびたび旅行している親日家の夫人宅にお世話になった。6月29日，Hamburg から飛行機で Berlin に入った。6月下旬とは言え，寒い天候である。翌日は日曜日で，現地に慣れるため，地図を片手に下宿宅の回りを散策した。ちょうど Berlin の中心地より少し離れたところで，東西を分ける“壁”にも遠くない。有名な戦勝記念塔や旧日本大使館にも徒歩で行ける範囲である。過去数度 Berlin を訪問したが，ゆっくり徒歩で街を歩いてみるとまた，異った印象を受けるものである。表

ゲーテ：若きヴェルテルの悩み（ゲーテ全集第７巻）　人文書院（1965）前田敬作訳
ゲーテ：若きヴェルテルの悩み（世界の文学５）　中央公論社（1969）内垣啓一訳
ゲーテ：クラヴィーゴ（ゲーテ全集第３巻）　人文書院（1970）吉田正己訳
ゲーテ：わが生涯より　詩と真実抄　白水社（1970）斎藤栄治訳
ゲーテ：詩と真実　１部・２部　ゲーテ全集９巻人　人文書院（1970）菊盛英夫訳
　　３部・４部　ゲーテ全集10巻　人文書院（1972）菊盛英夫訳
ゲーテ：ゲーテ全集　12巻　人文書院（1967）小牧健夫他共編
グンドルフ：若きゲーテ（１巻）　未来社（1970）小口　優訳
　　古典期のゲーテ（２巻）
　　晩年のゲーテ（３巻）
玉林憲義：若きゲーテ研究　創文社（1973）
木村謹治：「若きゲーテ」研究（改訂版）　弘文堂書房（1938）
舟木重信：ゲーテとその世界　創芸社（1949）
道部　順：ゲーテの生活と詩の鑑賞　新地社（1952）
赤井慧爾：ゲーテの詩とドイツ民謡　南江堂（1982）
ロベルト・シンチンゲル：詩人の肖像　第三書房（1976）
レッシング：レッシング名作集　白水社（1972）有川貫太郎他訳
ヘルダー：言語起源論　大修館書店（1972）木村直司訳
手塚富雄教授還暦記念論文集　ドイツ文学における伝統と革新　筑摩書房（1965）
マックス・フォン・ベーン：ドイツ18世紀の文化と社会　三修社（1972）
ルージュモン：愛について　エロスとアガペ　岩波書店（1972）鈴木・川村訳
岡田朝雄・岡田珠子：立体ドイツ文学　朝日出版社（1970）
相良守峯：ドイツ文学史（上・下）　春秋社（1969）
菊地栄一，その他共著：ドイツ文学史　東京大学出版会（1973）
佐藤晃一，その他共著：ドイツ文学史　明治書院（1971）
ブリュフォード：18世紀のドイツ　ゲーテ時代の社会的背景　三修社（1974）
林健太郎：ドイツ史　山川出版社（1964）
酒井良夫，その他共著：白旗信教授記念論文集　東京都立大学独文研究室（1969）
斎藤栄治：ドイツ文学特講講義メモ（1972～1974）
登張正実：ドイツ教養小説の成立　弘文堂（1964）

人 Friederike を題材にしたとの説がある。Cornelia はゲーテの友人 Johann Georg Schlosser（法律家）に嫁ぐが短命にて歿す（享年27歳）。ゲーテは最愛の妹コルネリアの肖像画（詩人自身が描いたものである）を「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」初版の校正刷りの上に配している。Sesemheim の牧師 Johann Jakob Brion の娘であった Friederike Brion (1752—1813) はエルザス地方の Niederrödern に生れ，ラール近郊の Meißenheiß でその生涯をとじている。詩人がシュトラースブルクの学生時代（1770年10月），彼女を知ることとなるが，二人の愛について，またその経過は，ゲーテの自叙伝となった大作「詩と真実」Dichtung und Wahrheit (1811—1814) の中に素晴らしい断章の一節として物語られている。彼女との愛の破局（1771年8月）は，その後の詩人の創作活動はもとより，精神的にも多大な影響を及ぼすこととなったが（殊に作品「ファウスト」Faust に現れる Gretchen などは彼女をモデルに描かれている）また詩人の心の奥深くに決して癒されることのない彼女への罪悪感をも残すものとなった。彼女に捧げた数々の詩や歌は，新鮮な体験から湧き出る叙情的な詩法の完成と素朴な自然感情の発露となった。(Mailied, Willkommen und Abschied usw.) 詩人はこの地でヘルダーとの親交をはじめ，彼の影響下でイギリス演劇，ことにシェークスピアなど古典演劇を勉強し，彼の創作上の手本となった聖書研究なども手がけている。

（注5）作品では，ゲーテが自由に創作した架空の人物である。史実にあるファビアン・フォン・ヴァルスドルフと言われている。（人文書院 ≫ゲーテ全集≪ ）より

（注6）ゲーテの母 Catharina Elisabeth (Textor) Goethe (1731—1808) にちなんで命名され貞節な愛情豊かな女性像を連想している。ゲッツは2度結婚しているが，妻の名は二人ともドローテアであった。（同 ≫ゲーテ全集≪ ）より

（注7）親友 Franz Christian Lerse (Lersé, Lersée) (1749—1800) にちなんで作品へ描写した。シュトラースブルク時代の旧友で神学の学生であった。ゲーテと共にシェークスピア演劇に熱中したようである。後に彼はコルマールの兵学校の視学となった。

参考文献一覧

J.W.v. Goethe: Götz von Berlichingen, Reclam Verlag (1969)

J.W.v. Goethe: Poetische Werke. Berliner Ausgabe 7 und 13.
Götz von Berlichingen, Aufbau-Verlag Berlin (1963)

J.W.v. Goethe: Die Leiden des jungen Werthers, Reclam Verlag (1969)

Peter Boerner: J.W.v. Goethe in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten, Rowohlt-Verlag (1973)

Stephan Ankenbrand: Meister in Poesie und Prosa, Verlag-Martin-Lurz (1966)

Heinrich Haerkötter: Deutsche Literatur Geschichte, Winklers Verlag (1971)

Brockhaus Entyklopädie (1967)

Goethe Werke: Drama, Band. 2, Buchclub ex Libris Zürich (1972)

Goethe Werke: Dichtung und Wahrheit, Band 5., Buchclub ex Libris Zürich (1972)

ゲーテ全集：ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン（第3巻） 人文書院（1970）井上正蔵訳

ドイツの文学：ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン（第1巻） 三修社（1995）井上正蔵訳

ゲーテ：若きヴェルテルの悩み 白水社（1966）国松孝二訳

ゲーテ：若きヴェルテルの悩み（世界文学ライブラリー） 講談社（1971）斎藤栄治訳

団の先導の役目を果たさざるを得ぬ結果となった。……

vgl. Brockhaus Enzyklopädie, Zweiter Band ATF-BLIS s. 378 (1967) vom obengennten Text übersetzt

(f) Anmerkungen：(注)

(注1) Urgötz: Geschichte Gottfriedens von Berlichingen mit der eisernen Hand, dramatisirt. (1771)

ゲッツ草稿には次のように記されている。

≫Das Unglück ist geschehn, das Herz des Volcks ist in den Koth getreten, und keiner edeln Begierde mehr fähig. Usong≪

『災いはかくの如くして起こってしまったのだ。民衆の心は汚泥の中へと陥ってしまっている。誰れ一人として高貴な願いなどもはや求めることは出来ないのだ。』

a.a.O. Goethe Werke 2. Band, Anmerkungen s. 988 Buchlub ex Libris Zürich hg. von Ilse-Marie-Barth

Personenregister (zum Nachschlagen); die im Drama "Götz" auftretenden

Kaiser Maximilian	Lerse
Götz von Berlichingen	Franz, Weislingens Bube
	Kammerfräulein der Adelheid
Elisabeth, seine Frau	Metzler, Sievers, Link, Kohl, Wild,
	Anführer der rebellischen Bauern
Maria, seine Schwester	Hoffrauen, Hofleute, am Bambergschen Hofe
Karl, Söhnchen	Kaiserliche Räte
Georg, sein Bube	Ratsherrn von Heilbronn
	Richter des heimlichen Gerichts
Bischof von Bamberg	Zwei Nürnberger Kaufleute
Weislingen	Max Stumpf, Pfalzgräflicher Diener
	Ein Unbekannter
Adelheid von Walldorf	Brautvater, Bräutigam
Liebetraut	Berlichingsche, Weislingsche, Bambergsche
Abt von Fulda	Reiter,
	Hauptleute, Offiziere, Knechte von der
Olearius, beider Rechte Doktor	Reichsarmee,
	Schenkwirt, Gerichtsdiener
Bruder Martin	Heilbronner Bürger
Hans von Selbitz	Stadtwache, Gefängniswärter, Bauern
Franz von Sickingen	Zigeunerhauptmann, Zigeuner und Zigeunerinnen

Anmerkungen:

(注2) 現在の Baden Württemberg 州（州都 Stuttgart）にあり，Heilbronn 近郊の町。

(注3) バンベルクの僧正。史実の人物でリンブルクの宮内官ゲオルク3世のことである。

(注4) ゲーテの妹 Cornelia (1750—1777) をモデルにした説と，シュトラースブルク時代の恋

程に伝わってくることは詩的世界のもつ神秘さそのものなのであろう。不朽な精神は永遠にその輝きをも失なうことはないという証なのであろう。過去に生きた詩人および詩作の永劫不朽の論理をあらためて私たちに覚醒させてくれる観がある。

(e) 補足 (1) 史実の人物 Götz von Berlichingen（訳出）

シュバーベン地方の貴族で，帝国直属の騎士（足軽の将校）であり1480年に Jagsthausen に生まれ，1562年7月23日 Hornberg 城にて歿す。幼年時代より皇帝陸軍の大将および辺境伯（神聖ローマ帝国辺境地の公爵）のもとに養育を受けた。1504年の Landshut における王位継承戦争（Erbfolgekrieg, 1504年）の際，右手を失ない鉄製の義手でそれを補い，その後も決して卑屈になることなく寧ろより勇猛に数々の地方諸侯間に生じた私闘へ参加し（就中 Nürnberg, Kurmainz の戦いが有名），2度の追放を受けた。1519年 Götz は領主 Ulrich von Würtemberg 公爵に加勢しシュヴーベン同盟（Schwäbischer Bund）と交戦するに至り，敗北し捕捉され1522年まで Heilbronn に拘禁された。農民戦争（Bauernkrieg 1524/25）で指導者たちの過激な戦法を抑制したものの逆に反乱軍の強い要請もあり，1525年半ば，Odenwald の戦いでこともあろうに反乱暴徒たちの陣頭指揮をとることになった。これが原因でシュヴァーベン同盟の手でふたたび捕われ1528年から1530年まで Augsburg に投獄された。カール5世（Karl der Fünfte, 1500—1558）の命により1542年トルコ軍，1544年フランス軍と戦いを交えた。

Pistorius（？—1583）によって記された Götz の伝記は，後年ようやく1731年 Nürnberg で出版された。ゲーテの戯曲 ≫ゲッツ≪ の原典である。

vgl. Brockhaus Entyklopädie Zweiter Band ATF-BLIS s. 560 (1967) vom obengenannten Text übersetzt

補足 (2) ドイツ農民戦争 Bauernkrieg (1524/25) に現われる Götz von Berlichingen（訳出）

……Würzburg や Rothenburg などの中世諸都市に居住していたフランケン地方の農民たちは，Wendel Hipler や Florian Geyer 等の指揮のもとで農民思想，つまり彼等を支配する帝国領主たちを威圧し得るにたる農民選出の独自の皇帝を擁立しようと推進し，Heilbronn では農民政党の結成をも計った。こうした農民群衆を指導する人々の中で，不本意ながらもその首領として祭り上げられた帝国軍属の騎士であるゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンは，無差別に意味なく城や僧院を襲い破壊する農民軍

殊な時代的背景を重視し，ともすればゲーテ時代の一般民衆にも欠落しつつあったドイツ的民族意識とも言うべき人間の誠実さ，正義あるいは生への正当性を必至に探し求め，伝承するに値しない短絡的なものと化してしまった悪癖や悪習に対しては毅然と立ち向おうと抵抗を試みている諸点はいかにも Sturm und Drang の時代と呼ばれる斬新な革命的文学の新らたな道を自らがその旗手となり，切り開き創造していった詩人ゲーテらしい姿として甦える。こうした既成の枠から脱却した芸術の解放こそ，ゲーテ時代に生きた誰しもが切望していたものであった。だが故にその先達となったこの作品もそのような意味で多くの人々の賛同を得て受け入れられたのでもある。劇の展開技法，戯曲に用いられた種々の革新的語法などは，明らかに疾風怒涛時代の若き詩人たちにとってことの他すぐれた範例ともなったことは事実である。

前述したようにこの作品の初稿は1771年であるが，それには表題として次のように標記されている。『鉄手ゴットフリーデン・フォン・ベルリヒンゲンの物語，その戯曲（1771)年』"Geschichte Gottfriedens von Berlichingen mit der eisernen Hand. Dramatisirt" (1771)。この初稿はゲーテ直筆のものであり今日なお『ゲッツ草稿』"Urgötz (1771)"(注1) としてゲーテ・シラー文献公文書の貴重な資料として大切に保管されている。

この後かなりの時を経るが詩人シラーによって詩作された彼の傑出した作品と称される戯曲『ヴィルヘルム・テル』"Wilhelm Tell" (1804) もまさしくこの若きゲーテならびに『ゲッツ』に起因した疾風怒涛そのものを明らかに継承しており，二人の天才的詩人の創作上の酷似性を窺わせる。作品の時代設定も近似しており，シラーの作品は，神聖ローマ帝国 (Das Heilige Römische Reich Deutscher Nation) 中葉を背景として繰りひろげられる一武勇伝であるが，当時の絶対的権力を誇っていたハープスブルク家一族の支配下にあった小都市スイス(Confoederatio Helvetica, Schweizerische Eidgenossenschaft と後に命名される）の独立にまつわる農民一揆の動きや，史実伝説に由来するテルなる架空の人物についてさらに詳細にシラーはゲーテから聞き知り，これを基礎として古来からスイス地方に伝承されている昔し話し，即ち弓の名手がリンゴを見事射落とし人々から賞讃を受けたという説話とを融合し，シラー独特の技法で自由の理念をモチーフとし，これを戯曲に織り込み詩作したものである。因みに詩人シラーはこれまでに一度としてスイスへ足を踏み入れたことはなかったのである。このようにここに挙げた二人の詩人が新たなドイツ文学の礎えを構築し，同じ激動の時代を共に歩みながら体験した Sturm und Drang とその精神的葛藤の世界，そこに生きた詩人たちの臨場感がこの二人のあらゆる作品を通しても私達に不思議な

多くは自己の内面から発する純真な感情の吐け口を見い出すことすら出来ず，ただただ己の感性にのみ惑溺するのみであった。このように激する文学活動の中では，ゲーテやシラーなどのごく限られた詩人たちだけが終極的に自己に内在する抑え難き激昂を，詩人としての精神的完成へと移行させ，個を集中させることによりようやくしてSturm und Drangを克服し，徐々に詩作の上では不可欠な≫個の秩序と調和≪を享受し，彼等独自の文学・詩の理想境へ到達してゆくことになる。このように疾風怒涛をみずから体験し，それを超越し得た詩人たちを中核とする新たな文学思潮，即ちドイツ古典主義 Deutscher Klassizismus (ca. 1786—1805) の到来も真近に迫りつつあった。

ところでゲーテの詩作による，この全体五幕から構成される傑出した短編戯曲『ゲッツ』は16世紀中世ドイツを舞台にある農民一揆においてその指導的役割を果たしたフランケン地方の帝国直属である騎士ゲッツなる人物の自叙伝に基づいて創作され，戯曲化されたものである。ゲーテはこの作品を極めて自由な詩の形式で且つ意欲的に1771年10月下旬から同12月上旬にかけて驚異的な早さのうちに戯曲として完成させている。詩人独自の立場にたち既存の自伝に記された展開を改変し，これに伝説上の事柄あるいは副次的人物を充分に研究した上で作品に加筆したものである。バイエルン王位継承戦争 (Bayerischer Erbfolgekrieg 1504) のさ中に右手を失ない鉄の義手をつけていたことから俗に≫鉄手のゲッツ≪と呼ばれた実在の人物をモチーフとして作品に組み込み，ある土着の騎士が皇帝に対しその忠誠心をあくまで堅持し，それを貫徹し真理と正義，そして人間の当然の権利とも言える自由を求めながら生きぬく姿を描写している。しかし，そのような剛毅な真実一路の人生を目指す人間ゲッツですら悪意に満ちた敵側の陰謀と，加えて考えも及ばない味方の背信との二重の痛手を受け苦悩し，心ならずも屈辱を甘受し破滅の一途を辿ってゆく結末である。

シュトラースブルク時代，学業としての法律学を研究する傍らイギリス演劇に興味を持ち，次第にそれに没頭していったゲーテは，シェークスピア(Shakespeare, William 1564—1616) を研究する過程で一種の衝撃的 dramatisch な影響を受け，ヘルダーの文学的言語学理論に感化され，これまでの演劇形体の本流ともいえた古典フランス演劇の有する技法上の伝統的法則を打破することとなった。即ちゲーテのこの作品には古典劇の原則と考えられる≫場≪ Ort ≫時≪ Zeit そして ≫筋≪ Handlung といった戯曲における三統一 (Die Drei Einheiten) の技法はもはや見い出すことは出来ない。同時に素材の主たるものを当時の史実に求め，それを基盤に中世末期の特

することを試みようと考えている。

(d) ドイツ文学史的観点にもとづく Sturm und Drang，ならびに ≫ゲッツ≪ 詩作に至るまでの詩人の周囲およびその概要

ごく自然に，その歴史的必然性とも考えられるこの時期，18世紀末のドイツ国内に興隆した新たな革命的と言えどいささかも過言ではない文学の新潮流である ≫シュトゥルム・ウント・ドラング（疾風怒涛）≪ 運動 Sturm und Drang Bewegung (ca. 1767—1785) が生れた。この運動の根底に内在する意義を把握し，これに共鳴した同世代に生きる詩人の一人である作家クリンガー Friedrich Maximilian Klinger (1752—1831) によって創作された戯曲 "Sturm und Drang" (1776) の主題にちなんで命名されたことは誰れしもが知るところであろう。この疾風怒涛運動に起因する文学の新たな潮流とは，単に既存したる観念的理性万能思考を崇拝せんとする当時の啓蒙主義 Aufklärung (ca. 1720—1785) を自力で乗り越え，私的感情といった素朴な自己の解放を希求し，個人を主体とした全ゆる意味での士気高揚を向上の指針として更には独創的傑出した人間，即ち個人の有する〔才〕≫Genie≪の尊重を標傍しようとするものであったと言えよう。当時のドイツがその現実を鑑みるに全ゆる文化的視点で他国から受けざるを得なかった，所謂，模倣 ≫Nachahmung≪ から如何に脱却し，あくまでも独自の土壌に培われ形成された自国の一般民衆文学およびその文化をより創造し，推進することを目的とした疾風怒涛運動とはその思想の哲学的先駆者としての役割りを担ったハーマン Johann Georg Hamann (1730—1788) の理念に運動そのものの源を発し，この画期的文学運動の理論的指導者としてヘルダー Johann Gottfried Herder (1744—1803) を擁し，さらには若き詩人ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe (1749—1832)，シラー Friedrich von Schiller (1759—1805) らによって熱狂的に受け止められ，推進具現化されることとなった。この運動の主たる特徴として挙げられるべき点は，多くの詩人たちによって創作されたものの多くが戯曲の形式に基づき詩作され，また作品を通して全ゆる角度から，既存の悪習や重圧的権力や虚構の存在，またその横暴さを擬視し，このような非情な社会構造とその中で苦悶を余儀なくされた多くの独創的個人との相剋とを描き出し，依然ゲーテの時代にあっても既習の概念としてまかり通る社会的ないまいましき不正や，人間不信に由来する数々の悪徳，世襲制を激烈な筆致で弾劾していることである。残念ながらゲーテ時代のドイツと言えども，こうした叛逆的な思想に啓発された数多くの若き詩人たちの情熱も，相変わらず打ち崩せぬ封建体制とのきびしい軋轢の中にあるばかりであり，若き詩人たちのその

われた多くのものを単に自己の内面に温存するにとどまらず，寧ろ詩人の創作と内的啓発のためにそれら全てを跨躇することなく詩作へ注ぎ込み，詩人としての完全燃焼を計った。歓喜あふれるこの町を去って僅か数年という短期間に，詩人が戯曲『鉄腕の義手ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』と小説『若きヴェルテルの悩み』(1774年)などの画期的とも呼べる二大作品をまたたく間に，しかも精力的に詩作している点からしても詩人のその激変は容易に窺い知れよう。フランクフルトの生家に戻ったゲーテは1771年秋，中世に生きた実在の人物ゲッツの自叙伝を手に入れ，暫時これを読み耽り次第に創作意欲を駆り立てられて祖国ドイツの変革の中で剛健にして誇り高く自主独立の精神で常に泰然と生きぬいた一人の騎士像を素材とし，ともすれば社会的矛盾に何んらの疑念もいだかず時流にまかせ生きようとする同時代の柔弱な民衆の眼前にそれを彷彿しようと詩人は考えた。草案もないまま一気呵成の勢いで書き下ろした草稿（1771年）は，これまでの戯曲の慣例的な形式を打破し，いわゆる ≫筋≪ を無視したあくまでも一つの出来事の描写に主眼をおいたものであった。いかに誠実勇猛なゲッツとて寄せ来る暗然とした激浪には立ちはだかることも叶わず，心中から湧き出ずる人間の自由と解放をいくら高らかに公言したとて，それは何んら功も奏さず，到来する新たな流れの渦に巻かれ，ただ破滅の道を歩むばかりであった。

ゲーテも語っているが，草稿を書くにあたっては伝記を戯曲化した結果が実際の舞台では一体どのような姿になるかなどの点については一切配慮すべき必然性は彼には無かったのである。本来の伝統的演劇に適うよう草稿を手直しされたゲッツ劇の初稿は，1773年友人メルクの援助を得て『鉄腕のゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』と題され発表された。

こうした様々な状況の中で詩作された戯曲を，その具体的劇の展開を中心に考察し，詩人ゲーテ的小宇宙なる世界を探り，詩人の作品中に隠されたゲーテ的法則，またその法則の輪郭や概念を若干ながらも繙きつつ詩人と作品に接近しようと試みることがここで狙いである。何分未熟故，全くもって稚拙な小論となることは疑う余地が無いものの，自らの限界を知りつつも敢えてこれを試み，筆者としては腹蔵の無い論旨を明快に述べようと努めている点をご理解いただき，かつ諸先学の御批判をいただければ筆者にとっても幸甚の次第であります。

追記：紙面の都合上，今回記した小論は，試論〔1〕であり主に作品の概要を中心に論ずることとした。したがって作品考察には至らぬ，いわゆる書評に類したものであることをご承知いただきたい。尚，試論〔2〕では作品の具体的展開を踏まえて論じ，ゲーテ的ヒューマニズムなど諸点に総括的に触れそれを具現化

ぎず，恰も筆者自身が，その対象とする詩人そのものであるかの如き妄想にかられて論じていることに全く疑問がない訳でもないのだが，現実的自己の世界を充分に認識すべき必然性を承知した上でのこと故，敢えてここに深遠なる理念をうちたてた詩人に関して自由闊達とはいかないまでも思うがままに論じたところで，いかなるものも筆者を諌めることはなかろうと確信している。まして才知あふれるゲーテの如き詩人なれば筆者の拙悪な論を読み，笑うことはあろうけど激怒することなどあろうはずがないとも思っている。詩人の天与の才能を，彼の辿った生涯とその道程の中で詩作されたおびただしい数にのぼる諸作品とを一種のある統一性のうちに見い出し，私たちに与えられた読み手の「勘」とを頼りに，その力を存分に発揮させ駆使しつつも可能な限り詩人に近づき深く理解しようと努めることは，詩人を愛し多少なりとも詩人の研究に関心を持っている浅学非才な筆者にとって，また一学徒としての全く他意のない純粋な望願であり一指標でもある。

詩人の詩作活動はたえず小宇宙的世界の中で営まれ，詩人の内面的特性に由来する個有の法則に基づいた上に成り立っているので，果してこのミクロの世界へ潜入しその法則たるものを精確無比に捉え得るものか，小論を試みようと企てた自分にすら皆目検討もつかず，まして断言など出来ようはずもない。

ここに論じられる詩人ゲーテは，ラインプツィヒ時代，極度の苦悩が原因で彼を襲った精神的自暴自棄の症状と吐血するまでに至った重度の結核病とを併発したことから，暫らく中断することを余儀無くされていた法律学の研究を再開すべく，1770年（ゲーテ20歳の時）春，都シュトラースブルクへ赴くこととなった。この地における思いもよらぬ新鮮さに溢れた生活は，確かに短かくはあったものの，それ以降の詩人の人生に与えた影響は絶大なものがあり，決して忘れ得ぬ悲喜こもごも，数々の実り多き体験ともなった。殊にこの時期は詩人の精神的羨望の的となる人物との出会いや，予てより希求しつづけていた ≫自己の変革≪ と ≫自己に内在する個≪ を再生しようとする意味からも重要で，且つ注目すべき時間的空間であった。所謂ゲーテ的シュトゥルム・ウント・ドラングの粒子がここに生まれ結晶体へと生成されさらに磨き上げられてゆくのである。前述したように彼の人生を決定づけることとなったヘルダーとの交わり，若き詩人に愛の偉大さを教示諭し得た美しきフリーデリケ・ブリオンとの出会い。こうした精神的な支えに加え，ライン川上流に位置するこの地方特有の牧歌的で絵画のような田園風景に恵まれた広大な自然。そのいずれもが美事に調和され融和されて詩人の心に痛烈な刺激を与え，感動を喚起させ，彼を抒情豊かな非凡な詩人へと形成してゆくのであった。シュトラースブルクを後にした詩人はこの時代に培

た。しかしながら暴徒の指導者メッツラー Metzler やズィーフェルス Sievers らとの思想上の問題で悉く対立し，果ては無意義な暴挙のため大切な家臣ゲオルクやゼルヴィッ Hans von Selbitz すらも失なってしまう。叛逆者の汚名を着せられ狂人という烙印までも押されたゲッツはヴァイスリンゲンの手の者によりふたたび囚われの身となりハイルブロンの獄中に過ごすこととなった。兄を慕う妹マリアはゲッツの妻エリーザベト Elisabeth(注6) のことを思う余り，曾ての恋人ヴァイスリンゲンのところへ赴き，ゲッツの免罪を嘆願する。既にヴァイスリンゲンの手の中にはゲッツを死罪に処する内容の判決書が握られていたものの，彼の前に立ちはだかるマリアの純真な姿をみるに及びヴァイスリンゲンは遂にその判決書を破りすてるのであった。人間の真の生きるべき姿をようやくにして知り得たヴァイスリンゲンではあったが，時すでに遅くアーデルハイトの奸策にかかり下僕フランツ Franz の手で毒殺されてしまう。暗殺に手を下したフランツも何故か自らマイン河畔へ身を投じる。一方，悪女アーデルハイトは逝去したマクシミリアン皇帝に代り即位することとなったカール帝 Karl der Fünfte におもね，近づこうと企てるものの秘密裁判 (das heimliche Gericht) に掛けられ人知れぬまま葬り去られる。

暗黒の時代を象徴するようなゲッツの牢獄，その小さな牢の庭にもこれから訪れるであろう明るい未来，自由のみなぎる世界を予言するかのように陽光がさんさんと照りつける。澄みわたる爽やかな中，主人公ゲッツは妻エリーザベト，妹マリアと家臣レルゼ Lerse(注7) らに看とられつつ，彼の最後の言葉『自由！』を口吟みながら天へと昇ってゆくのだった。

〔追記〕　劇中の登場人物に関しては参考として Anmerkungen(注)に Personenregister を掲げた。

(c) 試論への手がかり

ともかく詩人の誰れもが有している彼等の測り知れぬ天分というものは，それが如何なる社会的要因に基づいていようと，またどのような生理学的観点から洞察しようとしたところで，本来的にその天分なるものは決して解き明かし得るものではないものと日頃から考えている。こうした視点で客体を眺めるからこそ，詩人の ≫才≪ に全面的に支えられ，詩人にのみ委ねられ創作された作品に関しても，私たち読み手の側からすれば自分たちの思うがままに解釈もし，加えてそこから抽出し得る詩人のさまざまな心理的衝動や内面的葛藤についても多種多様な観点から束縛されることなく論究することも可能となる。こうした試みは明らかに筆者の単なる自己満足にしかす

スリンゲンを解き放ったのである。だが優柔不断なヴァイスリンゲンはまたたく間に妖婦アーデルハイト (Adelheid von Walldorf)(注5) の怪しげな美しさの虜となり，盟友ゲッツと交した誓約を忘却し，果ては貞淑可憐なマリアの愛情をも悉く踏みにじることとなった。しかしあくまでヴァイスリンゲンを信じようとするゲッツは，その真意の程を確かめるべく家臣ゲオルク Georg を敢えて彼の居城バンベルク Bamberg に忍び込ませるのだが，真実は恐れていたように矢張りゲッツを裏切るものとなった。これに憤慨しついには人間不信の淵瀬に立たされたゲッツは，自分の家臣がバンベルク側の手勢に捕捉されたのは盟友と目していたニュールンベルクの商人 (Nürnberger Kaufleute)たちの彼に対する背信行為が原因だったことを知るに及んで，遂にフランクフルト(Frankfurt am Main)の大商いから帰途を急ぐ彼等の一群を襲撃したのだった。命からがらにして逃げ帰った商人たちは，この事件を領主マクシミリアン皇帝 Kaiser Maximilian に直訴することとなった。この機を自分の勢力拡大と地位向上の好機と考えたヴァイスリンゲンは，巧妙な策略を駆使してゲッツを奈落の底へと突き落とそうと目論んだ。謹慎処分を受け幽閉同然の身となったゲッツは自分の居城に心ならずも帝国軍を迎え撃つこととなる。ところで傷心の妹マリアはゲッツの親愛な友ズィッキンゲン Franz von Sickingen の愛を受け，これを承諾し彼の妻となっていた。帝国軍の攻撃を受けたゲッツは，あくまでも皇帝に背くことは自分の意に反するとの考えから，自発的にヤークストハウゼンを開城し，その条件として自由放免を確約されるはずであったが，これこそまさしくヴァイスリンゲンの奸策であった。彼は即刻ハイルブロンの牢に収監され，権力的帝国評議会によって作成された不本為な偽りの誓約書を危うく書かされる状況に立つが，義弟ズィッキンゲンの援軍の手で救い出される。その後，皇帝との間に交わされた一切の私的闘争を慎むという締約を条件にゲッツはヤークストハウゼンへの帰城を許される。暫時狩猟や自叙伝 (Autobiographie, Lebensbeschreibung)(補足1参)の執筆に専念し，平穏な日々をすごしていたゲッツではあったが，生来極めて活動的な人物であったが為か，ふたたび時流の渦中へと引き込まれてゆくのであった。その結果ついに農民戦争 (Bauernkrieg 1524/25)(補足2参)を取り巻く暴徒の指導者となるのだったが，然しこうした行動は必ずしもゲッツの意に反したものでもなかった。ともすれば単に暴動と見做されがちな農民戦争でさえも実は諸々の歴史の上に積み上げられてきた中世社会のかかえる大きな矛盾に対する歴然たる正当性の主張でもあり，正義感に起因する必然的な実力行使でもあった。だからこそゲッツのみならず一般の群衆さえも蜂起することとなり，また理念もなく盲従するだけで狂暴化した群衆の破壊的暴力行為をゲッツ自らの手で抑制し得るとも考え

handle, auch dieses Werk bis aufs höchste steigern und die volkstümlichen Fragen vorlegen, damit alle Zeitgenössischen und auch wir die heutigen auf immer die unverlorene Wahrheit finden werden.

(b) 作品ゲッツの梗概

とある場末の旅籠で酒に酔った足軽身分の騎士たちが交わす時勢を批判する快談の場面で劇は幕を開ける。中世ヨーロッパを中心とし拡大しつつある不穏な空気につつまれた社会情勢，所謂16世紀初頭に始まる王侯支配階層間の必然性をおびた権力志向依存の激しい対立抗争が，全く歯止めの効かぬ状態として描写されており，舞台展開の要となる歴史的背景をより鮮明に窺い知ることが出来る。主人公である騎士ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン (Götz von Berlichingen)(補足1参) は街道沿いに傭兵を配し，幼年時代からの友でもあったヴァイスリンゲン (Weislingen) を捕え自分の居城ヤークストハウンゼン (Jachsthausen 或は Jagsthausen)(注2)へと彼を拘引する。このヴァイスリンゲンなる人物を，剛毅な主人公ゲッツの終焉に至るまでの劇中における宿敵の一人とみなし描いており，地方に点在する諸侯や貴族たちの利権をめぐり，私利私欲に絡みとどまることを知らない醜い争い，こうした人間精神の深刻な荒廃の時代を大きな背後にかかえ，ありとあらゆる人々の欲望と功罪とがいかに民の心を傷つけ人間本来の理性をも崩壊させ，更には哲理すら失なう頽廃の極みにいたる中，時の支配者に迎合し，実に狡猾に生きのびようとする人物像，つまり私たち人間誰しもが持ち得るであろう心の微弱さ，極言すれば日和見主義的で欠陥多き，いまいましい憎悪すべき人物として設定した上で，詩人ゲーテはヴァイスリンゲンを意識的とも思えるほど露骨にここに描写したものと考える。ヴァイスリンゲンの側近であるバンベルクの僧正 (Bischof von Bamberg)(注3) にゲッツの家臣の一人が何んの謂れもないまま捉われたことに激怒したゲッツはその報復として旧知の友であるヴァイスリンゲンを縛する結果となった。だがゲッツはこうなったのも単に荒涼とした時代がヴァイスリンゲンを迷走させたものと判断し，この哀れな友を寛容にも自由の身とするが，それもこれも人間性に満ちあふれ恒常的で失なわれることのない人間愛に育まれたゲッツ，さらにはゲッツの妹マリア(Maria)(注4)との触れ合いがそうさせたのであろうか，自らを失ないかけていたヴァイスリンゲンは恰も彼本来の良心と誠意を取りもどし得たかのようにも思えた。つまり表向きには悔悛の情が窺えたのだ。ヴァイスリンゲンはマリアにその胸中を告白，愛を吐露し婚約をも交わすこととなった。ゲッツは彼が改心したものと信じ，二人の愛を祝福しこの後の友交を誓い合い，それ故ヴァイ

nen Hand" (1771) entstand als noch Student infolge des Ausbruchs von seinem inneren, Tag für Tag allmählich zunehmenden Drang dazu, was erneut selbst Goethe als irgendetwas Neueres hatte begehren wollen, und zugleich von den vielseitigen Beobachtungen seiner vaterländischen deutsch-historischen Zeiten, welche Goethe als die schlimmste Epoche im Heiligen Römischen Deutscher Nation hatte ansehen müssen. Der Objektivitätsansicht nach war es die Zeit politischer und sozialer Wirren; vor allem wütete darunter ein entsetzlicher Bauernkrieg in vielen Teilen Deutschlands (1525/26).

Dieses Werk "Götz von Berlichingen" sei ein uns Leser ins Herz anziehendes Drama, das, auf der geschichtlichen Tatsache gegründet, einen schlichten braven Mann in solchen verwirrten Zeiten dargestellt ist, der wohl als nur ein echter Mensch stets überleben wollte, aber vor seiner Reinlichkeitssucht schließlich von allen Verschwörern in einer der unruhigsten Perioden der deutschen Geschichte verstoßen werden mußte. Doch die ewige Wahrheit in der Menschheit, wonach diese Hauptperson "Götz" und dessen Dichter Goethe beide auf immer forschen wollten, könnte von niemand geleugnet werden, was doch auch auf dieser Erde geschähe. Das ist gerade dasselbe, was unser Goethe durch sein ganzes Leben hin gewünscht hat; *Das ewige unsterbliche Menschentum.*

Goethe suchte noch im Werk "*Liebe und Freiheit von Menschen*" als allerhöchste größte gehobene Menschennatur zu verkörpern. Er wagte jene Liebesgestalt aus freien Stücken zu erklären, indem er zugleich von Gewissensbissen, wie der junge Goethe selbst beim Friederikenserlebnis und bei der widerwilligen Trennung von seiner Geliebten ihr sich zu untreu benommen hatte, langzeitig gequält worden war. Die "Liebe," deren Sinne Goethe schon deutlich begreifen konnte, bedeutet die innere Schönheit der Menschen, den Anspruch aufs Menschentum aller irdischen Lebenden, das eben die reinvolle Gestalt des Menschen mit Humanismus erfüllt symbolisieren würde.

Außerdem machte jedoch sein geistiger Sturm und Drang nicht nur auf dieses Menschentum "Liebe" Anspruch, sondern auch auf andere symbolische "Freiheit," die in diesem Drama aufgetreten ist, als wäre dieselbe eines der wichtigsten Themen dieses Werkes. Tatsächlich hätte Goethe das Thema "Freiheit und Befreiung" für das zweitgrößte Motiv halten können. Kein Mensch könnte und müßte sowohl die aus sich glühende Liebe als auch die von jemand gehinderte Freiheit entbehren. Die Erforschung der Freiheit und die Sehnsucht danach bestehen in der Befreiung der Menschennatur und bedeuten die naturmenschlichen, eigentlichen, reinen und wahren Gestalten.

J. W. von Goethe wollte in seinem "Götz von Berlichingen" bis zu Ende anregen, daß es sich um die Absolutheit des Humanismus und Glauben daran

(**a**) Vorbemerkung: (einschl. des allgemeinen Resümees)

Über den Dichter Johhann Wolfgang von Goethe und ein Drama seiner ersten Werke "Götz von Berlichingen mit der eisernen Hand, Dramatisiert"

Hiroshi Kakihara

Wie weitbekannt, hatte die von den damaligen deutschen jüngeren Dichtern leidenschaftlich geförderte, sozusagen revolutionäre Literatur-Bewegung "STURM UND DRANG" (1767—1785) des 18. Jahrhunderts in dem deutschen dichterischen Gebiet diejenigen selbst über das bisherige aufklärische literaische Feld hin überwinden lassen und noch sie weiter aufs Neueste getrieben, was aus dem mehr innerlichen geistreichen Sinne des Menschen her entsprungen und geflossen war. Johann Gottfried Herder als der öffentlich theoretische Führer des "Sturm und Drangs" hatte eindringlich auf die folgenden Themen bestehen sollen; die Achtung und Ehrfurcht vor der schöpferischen Persönlichkeit, die Hebung des individuellen Gefühls und derselben Fähigkeit, den echten Idealismus, mit dessen Hilfe jedes Individuum aus den allen Fesseln des gezwungenen Gesetzes zu befreien sei, und sogar die höchste Schätzung der Geniekraft. d. h. die stürmischen und drangvollen Menschen könnten durch keine soziale Regelung, kein sittliches Gesetz und kein Bewußtsein des menschlichen Zwecks, sogenannt durch keine solchen äußerlicheren Motive geistig gerührt werden, sondern sie sollten mit dem ursprünglichen Lebensantrieb immer die Augen auf oben richtend fortleben, welcher aus dem Inneren des Menschen hervorströmt. Das ist ja selbstverständlich als der innere Subjektivismus von den Menschen zu verstehen.

Die Einflüsse Herders auf die zeitgenössischen jungen deutschen Dichter sind durchaus groß und unermeßlich gewesen. Das ist uns auch klar, daß es der junge, und unergründlich Genies bei sich habende Dichter J. W. von Goethe gewesen sei, der unter den obengenannten Dichtern am allerstärksten von dem Meister Herder beeinflußt worden sei und dazu sich unter anderem literarisch allmählich vorwärts habe bewegen sollen. Sein vergangenes, doch wirkliches an sich selbst viel schuldiges Liebeserlebnis mit seiner Friederiken in Studienzeit zu Straßburg hatte ihn absichtlich in die Dichtkunst immer stärker und geistiger gedrängt. Je heftiger sein innerer Konflikt geworden war, um so mehr und klarer war eine zu verwirklichende Gestalt des Menschen als Ideal und Motiv in seinen Werken erschienen.

Sein merkwürdiges dramatisiertes Werk "Götz von Berlichingen mit der eiser-

≫疾風怒濤≪を背景とした戯曲『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』に展開されるゲーテ的主題を中心に

柿　原　啓　志

試論〔1〕　(作品の概要を中心に)

(a) Vorbemerkung (einschl. des Resümees)

(b) 作品 ≫ゲッツ≪ の梗概

(c) 試論への手がかり

(d) ドイツ文学史的観点にもとづく Sturm und Drang, ならびに ≫ゲッツ≪ 詩作に至るまでの詩人の周囲およびその経緯の概要

(e) 補足：(1)史実の人物 Götz von Berlichingen (訳出)
(2)ドイツ農民戦争 Bauernkrieg(1524/25) に現われる Götz von Berlichingen (訳出)

(f) Anmerkungen：(注釈)
Zur Ergänzung, betr. das im Ur-Götz Wiedergegebene
betr. Personenregister (zum Nachschlagen)；die im Drama "Götz" auftretenden Personen usw.

試論〔2〕　(作品分析を中心に)

(g) 作品 ≫ゲッツ≪ への具体的考察

(h) ゲーテ的ヒューマニズムの具現化とは……その試み ≫愛≪ と ≫自由≪ を中心に

(i) 結び　Zum Schluß, ZUSAMMENFASSUNG

体力診断テストの7種目と肺活量は，優群は第4回目も必ず伸びているとはいえない……(反復横とび・伏臥上体そらし・踏台昇降運動そして肺活量)，その反面劣群は全ての種目に伸びがみられ，劣群の生徒の体力をどうとらえていくかが大きな課題ではないだろうか。

ま と め

生徒の体格・体力を年4回（5月・9月・11月・2月）測定して統計的に分析した結果，次のような事実がわかった。

1. 体格については回を重ねるごとに順当とみられる伸びがわかり，今後は体格を考慮した具体的な運動種目を設定する必要がある。
2. 体力の状況は5月の測定時には全国値の結果に比べて明らかに劣っているが，60年2月の結果を比べてみると明らかに本校値の方が良い結果が出ているが，踏台昇降運動だけは逆に本校値が大きく劣っている。又，第1回テストで最も低いテスト結果の劣群のグループの伸びが優群の伸びよりよいことも，今後の指導上の重要なこととおもわれる。

最後に体格および体力診断テストを通して，受験勉強一辺倒で入学してきた本校生徒の体力の現状を正確に把握して指導をするとともに体力的に伸びの少ない種目の積極的参加をいかにさせるかが今後の我々指導者の大きな課題であるといえよう。

参考文献

1) 青山昌二：体育測定の指導と処理・その活用　体育の科学　1976年3月号
2) 青山昌二：大学生の体格・体力の統計的分析，一体格類型と体力の関係および体格・体力の回帰分析一　体育学紀要　1974年第8号，東京大学教養学部体育研究室
3) 青山昌二：定時制高校生の体格・体力　新体育　1978年3月号
4) 青山昌二：体力運動能力テストの活用について　健康と体力　1984年4月号
5) 森本三千代：茨城県八郷町小・中学生の体格と体力テストについて(1)　日本体育学会（岐阜大学）1985年10月，測定評価発表資料より
6) 文部省体育局：昭和59年度体力・運動能力調査報告書，1985年
7) 文部省体育局：昭和59年度学校保健統計調査報告書，1985年
8) 西田ますみ：日本女子体育短期大学保育科生の体格・体力に関する研究　日本女子体育大学紀要　1984年
6) 音海紀一郎：高校生の体力評価に関する研究　研究紀要　獨協中・高等学校　1983年

以上を要約すると，

体格においては回を重ねるごとに伸びている特に身長の伸びの方が優れている。

体力診断テスト種目をみると背筋力が一番伸びが優れている。次いで垂直とび・握力・肺活量となり，柔軟性種目は伸びが少ない傾向を示している。特に踏台昇降運動に際しては2月の値が5月よりはるかに伸びが劣っている，筋力・瞬発力種目においては，よい結果が出ているが，敏捷性・柔軟性種目においては，あまりよい結果が出ていない。特に持久性種目の踏台昇降運動においては，はなはだしく伸びが劣っている。その原因を究明する必要があると思われ，測定時の疑問点を述べておく，

1) 脈拍測定に問題はないだろうか。

2) 季節に左右されることはないだろうか。

したがって踏台昇降運動テストにみる本校生徒の全身持久性の能力には問題があるとみなさざるをえない。この点は体育時における指導上留意すべき問題となろう。

種目ごとの第1回目の測定値優群・劣群の比較は表3，図2に示してあるように，第1回目（5月）の測定値の優群10名，劣群10名を抽出し第4回目（2月）の測定値（伸び）を比べたものである。体力診断テトスの7種目と肺活量をみると，反復横とびは1回目の優群・劣群の差は（38.0点），4回目の差は（20.0点）とその差は(18.0点）と4回目の劣群の方の伸びがよくなっている。

垂直とびは1回目の優群・劣群の差は（40.2点），4回目の差は（39.8点）とその差は（0.4点）と両者とも伸びている。

背筋力は1回目の優群・劣群の差は（39.5点），4回目の差は（30.4点）とその差は（9.1点）と4回目の劣群の伸びは1回目と比べると良い。

握力は1回目の優群・劣群の差は（39.9点），4回目の差は（40.5点）とその差は（−0.6点）と4回目の劣群の伸びは1回目に比べると悪い。

伏臥上体そらしは1回目の優群・劣群の差は（38.7点），4回目の差は（25.7点）とその差は（13.0点）と4回目の劣群の伸びは1回目に比べると良い。

立位体前屈は1回目の優群・劣群の差は（41.9点），4回目の差は（35.1点）とその差は（6.8点）と4回目の劣群の伸びは1回目に比べると良い。

踏台昇降運動は1回目の優群・劣群の差は（38.6点），4回目の差は（21.8点）とその差は（16.8点）と4回目の優群の伸びは1回目に比べると悪い。

肺活量は1回目の優群・劣群の差は（39.8点），4回目の差は（25.8点）とその差は（14.0点）と4回目の劣群の伸びが1回目に比べると良い。

以上を要約すると，

国平均の値より劣っているが，60年２月測定値と比較すると½標準偏差から１標準偏差上昇の傾向を示しその上昇が著しい。握力においても身長の伸びに近い上昇を示している。

反復横とびにおいては横ばい傾向であるが，瞬発力能力である垂直とびにおいては，59年５月測定値は全国平均の値より劣っているが，60年２月測定値と比較すると½標準偏差に近い著しい上昇を示している。

柔軟性能力である伏臥上体そらし・立位体前屈においては横ばいの傾向を示している。特に伏臥上体そらし測定時に腰痛をうったえる生徒や，大腿部後面のけいれんを起こす生徒が目立ち，測定回数を重ねるにともなって無理をしなくなったようであるがいまの段階では断定することはむずかしい。

持久性能力である踏台昇降運動においては，59年５月測定値，60年２月測定値ともに全国平均の値より１標準偏差以上，本校値が劣っている。

体格は，月日が経過するにしたがって順当に伸びている。筋力的能力・敏捷性および瞬発力に優れていることから，これらの能力を発揮して成就できる運動種目には比較的参加していると考えられるが，劣っている他の能力の発揮を必要とする運動種目には積極的参加がみられないと推測される。

59年５月時の値をＴスコアーで50点に変換して各々（９月・11月，60年２月）を折線グラフにしたものが図１である。

まず体格の２種目をみると，体重の伸びに比べて身長の伸びの方が優れている。この時期は伸長期に相当するのであろう。

次に体力診断テストの７種目をみる，敏捷性を要する反復横とびは５月・９月・11月とほとんど変動（伸び）がなく，２月によくなる傾向を示している。

瞬発力を要する垂直とびは毎回よくなる傾向を示している。筋力を要する背筋力と握力を比べてみると，両者とも９月の伸びにおいて差はないが，11月・２月の伸びの差が著しい。特に背筋力の伸びがよい傾向を示している。

柔軟性を要する，伏臥上体そらし・立位体前屈においては伏臥上体そらしは５月・９月・11月とほとんど伸びが少なく，２月によくなる傾向を示している。それに対して立位体前屈は９月・11月・２月と少しずつであるがよくなる傾向を示している。

持久性を要する踏台昇降運動は９月によい傾向を示しているが，11月・２月になるにしたがって９月より悪い値を示し，２月になると，５月より悪い傾向を示している。

肺活量は，９月・11月・２月とよい傾向を示している。

年２月の値，劣群(B)の59年５月と60年２月の値を比較したものである。

まず，体格の身長では，59年５月の測定値（151.3cm）と，全国平均の値（150.0cm）においては，本校値の方が1.3cm優れている，それが60年２月の値と比較すると１標準偏差以上，本校値が優れている。

体重においても59年５月の測定値（44.6kg）と，全国平均の値（41.7kg）においては，本校値の方が2.9kg優れている，それが60年２月の値と比較すると½標準偏差以上本校値が優れている。

体力診断テスト種目では，反復横とびは，59年５月の測定値（39.0回）と，全国平均の値（38.9回）においてはほとんど差はない，60年２月の値と比較すると½標準偏差以上本校値の方が優れている。

垂直とびは，59年５月の測定値（38.5cm）と，全国平均の値（43.1cm）においては本校値の方が½標準偏差値以上劣っている，60年２月の値と比較すると逆に½標準偏差近く本校値の方が優れている。

背筋力は，59年５月の測定値（72.9kg）と，全国平均の値（79.9kg）においては本校値の方が½標準偏差劣っている，60年２月の値と比較すると，逆に１標準偏差本校値の方が優れている。

握力は，59年５月の測定値（23.7kg）と，全国平均の値（25.8kg）においては本校値の方が½標準偏差近く劣っている，60年２月の値と比較すると逆に½標準偏差近く本校値の方が優れている。

伏臥上体そらしは，59年５月の測定値（45.6cm）と，全国平均の値（49.4cm）においては本校値の方が½標準偏差以上劣っている，又60年２月の値と比較しても½標準偏差近く本校値の方が劣っている。

立位体前屈は，59年５月の測定値（7.2cm）と，全国平均の値（8.7cm）においては本校値の方が½標準偏差近く劣っている，60年２月の値と比較すると逆に数値的には本校値の方が優れている。

踏台昇降運動は，59年５月の測定値（59.4点）と，全国平均の値（68.5点）においては本校値の方が１標準偏差以上劣っている，又60年２月の値と比較しても59年５月値同様本校値の方が１標準偏差以上劣っている。

以上の統計的事実を要約すると，

体格は，59年５月測定値と比較すると全国平均の値よりやや優れている。それが９月・11月，60年２月と経過するにしたがって上昇を示している。

体力診断テスト種目は，筋力的能力である背筋力においては59年５月測定値は，全

図 2　種目ごとの第１回目の測定値（優群・劣群）をＴスコアーに示したもの

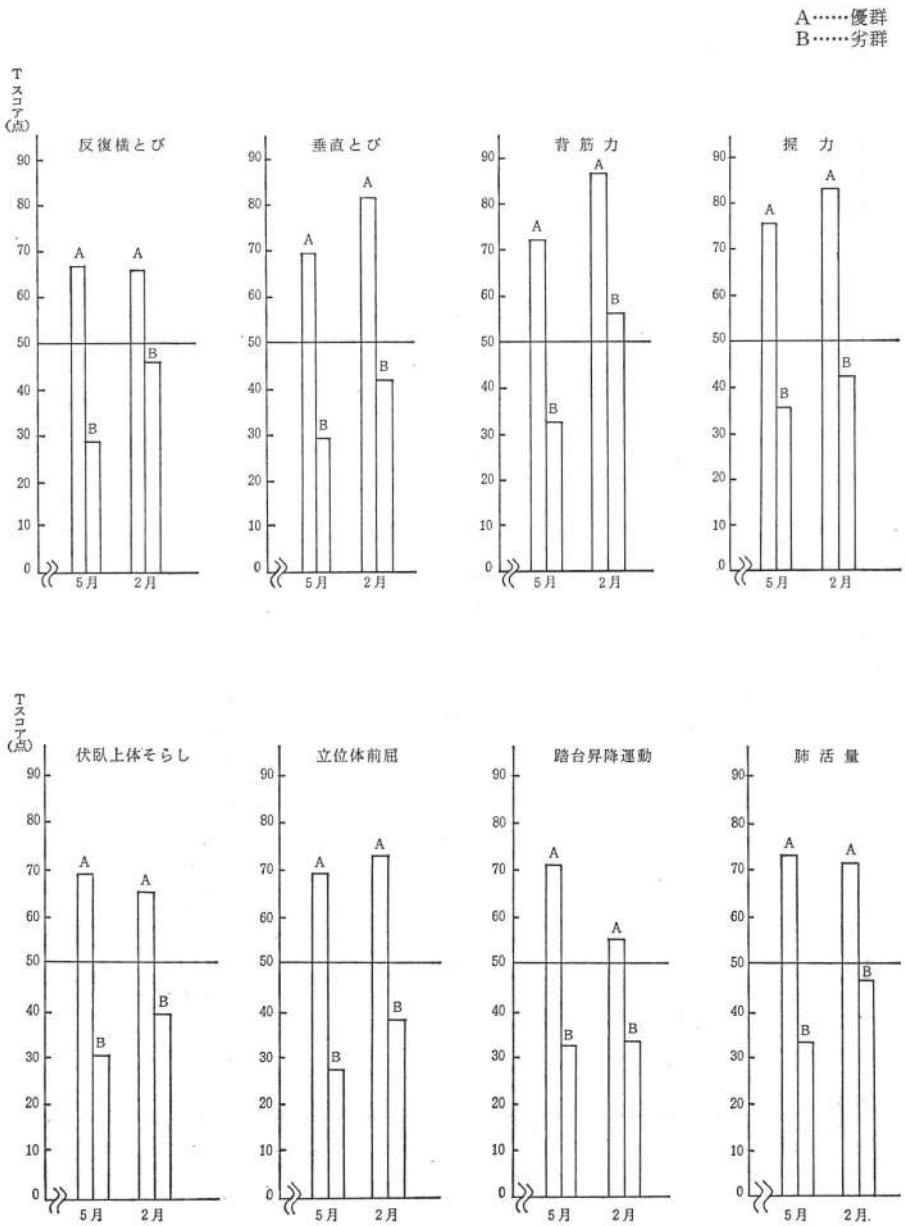


図 1　Tスコアーで5月時を50点とした場合の9・11・2月時の伸び

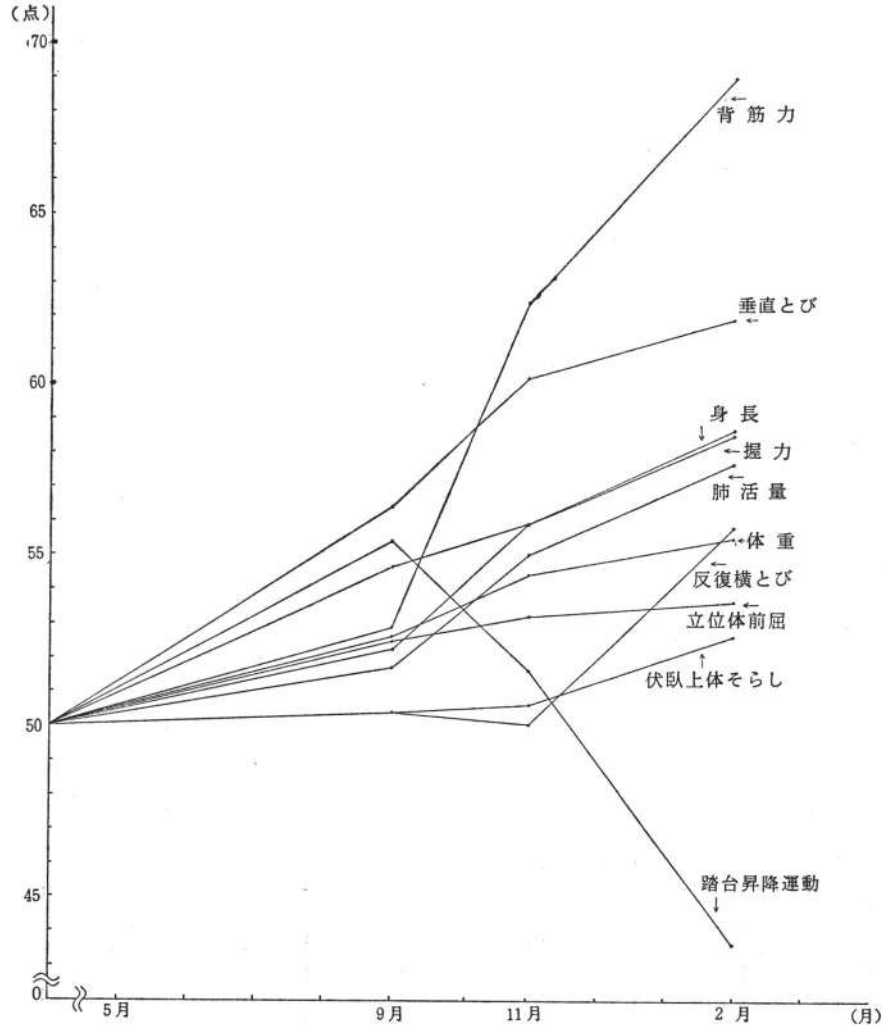


表 1　体格・体力診断テストの平均値と標準偏差

		身長 (cm)	体重 (kg)	肺活量 (ml)	反復横とび (回)	垂直とび (cm)	背筋力 (kg)	握力 (kg)	伏臥上体そらし (cm)	立位体前屈 (cm)	踏台昇降運動
5月	M	151.3	44.6	2,757.5	39.0	38.5	72.9	23.7	45.6	7.2	59.4
	S.D	7.6	9.4	537.0	4.5	6.3	15.8	5.4	6.7	5.3	7.1
	N	193	193	193	190	190	192	192	191	191	183
9月	M	154.8	47.0	2,847.5	39.2	42.5	77.3	24.9	45.9	8.5	63.2
	S.D	7.7	9.6	543.0	3.4	7.3	18.9	5.9	6.7	5.4	9.3
	N	192	192	191	188	190	189	188	190	188	182
11月	M	155.8	48.6	3,027.5	39.0	44.9	92.5	26.9	46.0	8.9	60.6
	S.D	7.6	10.0	540.0	3.8	8.0	21.0	6.4	7.0	5.2	8.5
	N	190	190	190	189	190	191	188	190	190	169
2月	M	157.8	49.8	3,171.5	41.6	46.0	102.7	28.3	47.4	9.1	54.9
	S.D	7.6	9.9	582.0	3.6	7.5	21.3	6.2	7.1	5.6	7.2
	N	186	186	189	185	189	189	189	187	188	180
S.59年度全国平均		150.0	41.7		38.9	43.1	79.9	25.8	49.4	8.7	68.5

表 2　Tスコアーで5月時を50点とした場合の 9, 11, 2月時の伸び

	5月	9月	11月	2月
身長	50.0	54.6	55.9	58.6
体重	50.0	52.6	54.3	55.5
反復横とび	50.0	50.4	50.0	55.8
垂直とび	50.0	56.3	60.2	61.9
背筋力	50.0	52.8	62.4	68.9
握力	50.0	52.2	55.9	58.5
伏臥上体そらし	50.0	50.4	50.6	52.7
立位体前屈	50.0	52.5	53.2	53.6
踏台昇降運動	50.0	55.4	51.7	43.7
肺活量	50.0	51.7	55.0	57.7

表 3　種目ごとの第1回目の測定値・優群と劣群の比較

	優れたグループ		劣っているグループ	
	5月	2月	5月	2月
反復横とび	46.7	46.3	29.6	37.3
垂直とび	50.9	58.3	25.6	33.2
背筋力	108.4	130.8	45.5	82.7
握力	37.5	41.6	16.0	19.7
伏臥上体そらし	58.5	55.9	32.6	38.7
立位体前屈	17.6	19.5	− 4.6	0.9
踏台昇降運動	74.4	63.1	47.0	47.6
肺活量	3,985	3,923	1,850	2,536

（各グループ10名）

中学生の体力評価に関する研究

音 海 紀一郎

1. 研究目的および方法

近年の青少年の体格は，顕著な伸びにもかかわらず体力が低下してきていることが社会的な問題として注目されて久しい。

年々一層受験競争の激化が低年齢化してくる中で，中学校の保健体育指導にたずさわっているものにとっては，中学生の体力の実態を把握し，その体力向上のためのより効果的な体育指導の条件を考えるための基本的資料を得ることはきわめて重要なことである。そのための手がかりとして，本校生徒の体格・体力について測定をしたので以下に報告する。

測定対象は，獨協中学校1年生全員(193名)男子生徒である。

測定種目は，体格は身長・体重の2種目，体力は文部省スポーツテストの「体力診断テスト」である。

反復横とび・垂直とび・背筋力・握力・伏臥上体そらし・立位体前屈・踏台昇降運動の7種目，およびこれに加えて肺活量の合計10項目である。この体力診断テストは運動の基礎要因である敏捷性・瞬発力・筋力・柔軟性・持久性の5つの側面より体力を診断するもので，測定の結果は判定表により種目ごとに5段階評定するとともに，その合計点によって総合的に各個人の体力を診断するものである。

測定方法は，文部省「スポーツテスト実施要項」によった。

測定時期は，昭和59年5月・9月・11月および昭和60年2月の4回実施した。

2. 結果および考察

1. 体格・体力診断テストの平均値および標準偏差

表1は，体格・体力診断テストの平均値および標準偏差で示したものである。表2および図1は，それらの平均値を標準偏差を基準としてTスコアーに変換し，第1回テストを50点として比較したものである。表3は，種目ごとの第1回テストの結果，高成績を示したもの（優群）10名と反対に最も低い値のもの（劣群）10名とを抽出して，その後第4回テストとのそれぞれの伸びについて比較をしたものである。図2はそれらの平均値を標準偏差を基準として，Tスコアに変換して優群(A)の59年5月と60

——執　筆　者——

蝦名賢造……学校長
音海紀一郎……体育科教諭
柿原啓志……ドイツ語科教諭
久慈栄志……社会科教諭
合田憲……ドイツ語科教諭

（五十音順）

紀要委員

安藤維男　木村重利
田代雄一　服部武司
藤本義信

研究紀要　第9号
昭和61年3月10日　印刷
昭和61年3月20日　発行
発行者　東京都文京区関口3丁目8番1号
獨協中・高等学校　紀要委員会
編集者　服部武司（代表）
印刷所　東京都豊島区東池袋5丁目6番14号
株式会社　豊島プリンティング

Review of Dokkyo Secondary High School

No. 9 **1985**

Contents

Articles:

Human Research in Teiyū Amano (note 3) ·····Kenzō Ebina··· 1

Researches on the Physical Strength Evaluation of Junior High School Students·····Kiichirō Otomi···(1)

Über einen literarischen Versuch und eine Analyse des größten Dichters, Johann Wolfgang von Goethe und seines Dramas „GÖTZ VON BERLICHINGEN"·····Hiroshi Kakihara···(9)

Introduction & Book Review:

The Birth of Railways & British Economy·····Eishi Kuji··· 23

Miscellanies:

Chronological Record of Teiyu Amano's Career ·····Kenzō Ebina··· 19

Über Geschichtsablauf von Dr. Wilfried Spinner mit Referat über das Seminar für ausländische deutsche Lehrer und Germanisten des Goethe-Instituts zu Berlin, 1985 ·····Ken Gōda···(24)

Edited by

Dokkyo Secondary High School Review Committee

Address : Dokkyo Secondary High School

1-8 3chôme, Sekiguchi, Bunkyo-ku, Tokyo